

3 . 知・住・悠の舞台となる 快適空間の形成

3 - 1 知・住・悠の舞台となる快適空間づくりのめざすもの

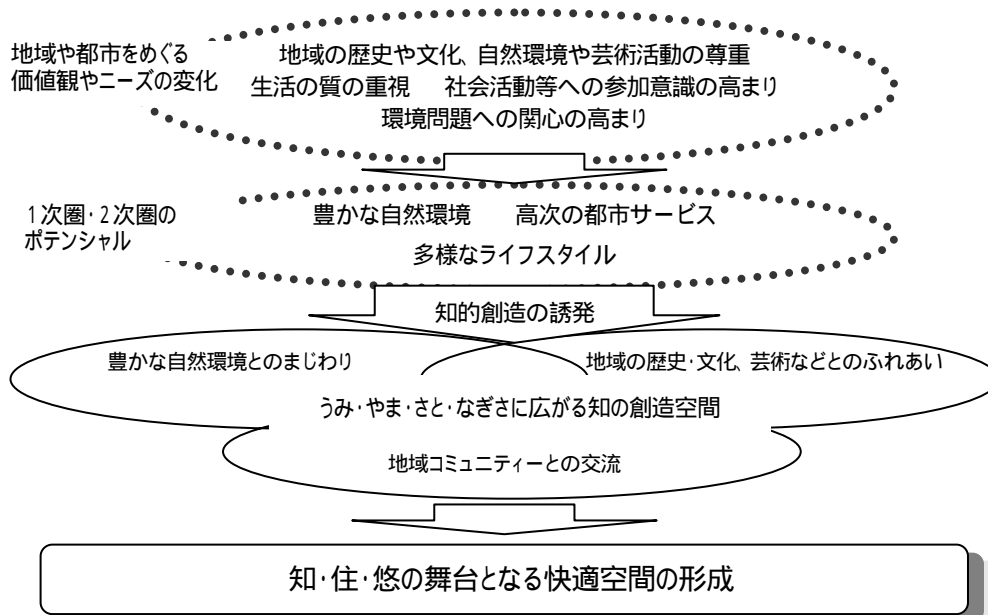
「知・住・悠の舞台」となる福岡市から唐津市にかけての地域は、高次の都市機能に恵まれるとともに、昔ながらの伝統・風土が根付いた豊かな田園環境と自然海岸などが地理的な変化に富み、我が国でも有数の地味豊かな空間を形成しています。

近年は、快適な環境、豊かな生活を求めて、多くの芸術家が糸島地域などに移り住み、また都市住民が新鮮な食材を求めてやってくるなど、この地域に向けた人々の関心は、ゆとり、安らぎのある暮らしや環境重視、地域の文化・自然へと多様なものになっています。

「知・住・悠の舞台」は、21世紀の知の社会を担う人々が、恵まれた自然環境に育まれることで心身をほぐし、地域コミュニティーや地域の歴史、風土、文化、芸術とのふれあいを通じて知的刺激を受け、新たな知の創造を行う空間となるものです。このため、本地域の持つ地理的・機能的特性を踏まえつつ、九州大学の持つ知の成果を活用し、自然との共生、環境問題への配慮、利便性の向上、地域社会への貢献などにより、「うみ・やま・さと・なぎさに広がる知の創造空間」づくりを目指します。

そして、下記の基本方針に基づき、産学民公が連携・協力し、「知・住・悠の舞台」となる快適空間の形成を図ります。

- (1) 本学術研究都市内の将来的な土地利用や社会基盤について、「知の中央ステーション: H S T」をはじめ、新たな地域科学技術システムの構築を視野に入れながら、九州大学新キャンパス及びその周辺の整備・誘導を図ります。
- (2) 九州大学新キャンパス周辺の農業機能、自然環境、市街地形成等の方針を明確化し、これらの機能がバランス良く発展するよう、土地利用の整備・誘導を図ります。
- (3) 本地域の豊かな自然環境に極力配慮した開発“ほたる”を整備・誘導を図ります。また、これの効率的な運用を図るための行政システムの整備(仮称)いとしま計画連合)について検討します。
- (4) 交通システムの形成にあたっては九州大学の持つ知、研究開発成果を活用しながら、公共交通の充実とパーソナル交通への対応を図り、また、環境・福祉にも配慮しながら整備を進めます。
- (5) より住みやすい環境や多様なライフスタイルなどさまざまなニーズに対応し、情報通信網のロードバンド化、環境問題にも配慮したエネルギーの安定供給、リサイクルなどを含む処理システム等さまざまな社会基盤の整備について、産学民公が一体となり循環型社会の構築を進めます。



3 2 1次圏の空間構成

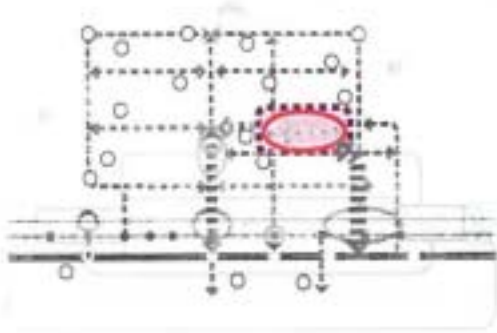
糸島地域を中心とする学術研究都市の1次圏では、自然や景観の特性、既成市街地や集落の状況、農業や個性的な芸術や産業等をふまえ、これらと共生する新たな機能の導入や、次世代に求められる情報や交通等基盤の充実を図ることにより、学術研究都市の主要な機能を担うエリアとして将来の飛躍を目指します。

1次圏の空間は、次のような考え方にに基づき整備・誘導を進めます。

- ・ 美しい“なごさ”と緑の山並みや歴史的景観は、現在の自然環境・歴史を次世代に受け継いでゆくべき財産と考え、原則として保全を図ります。
- ・ 南北を山並みに挟まれた平坦部については、のびやかに広がる農地を貴重な近郊農業の場として保全・振興を図ります。
- ・ 現在の市街地等は都市的な生活を営む場として、また学術研究都市の新たな機能の受け皿として適正な土地利用を進めるとともに、地域の生活において中心的な役割を果たしている地区は、その機能をより高めます。
- ・ 九州大学とその周辺には、研究・開発機能や交流機能等の集積を図り、学術研究都市が飛躍するための拠点とします。
- ・ 学術研究都市に求められる研究・開発、居住、レクリエーションなどの場として、丘陵地等に環境と共生できる分散型の受け皿を整備・誘導します。
- ・ 1次圏内をネットワークする交通基盤の整備を進めるとともに、唐津方面や福岡都心部、佐賀方面への交通網を強化します。



■ 1次圏の空間構成概念図



【学術研究都市コアゾーン】

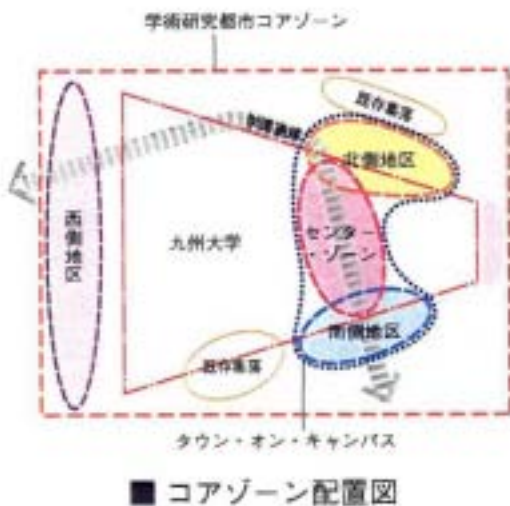
・九州大学新キャンパスの位置する丘陵地とこれを取り囲む周辺地域を、学術研究都市形成において先導的で中心的な役割を果たす研究・開発機能等の集積や、学生などを受け入れる新たな居住地からなる「学術研究都市コアゾーン」と位置づけます。

・学術研究都市コアゾーンでは、研究・交流機能や地域連携機能および学生居住機能等が配置される九州大学のセンター・ゾーンと、これに近接する周辺地区を一体的に整備・誘導し、学術研究都市の中心的な役割を果たすHST拠点となる「タウン・オン・キャンパス」を形成します。この「タウン・オン・キャンパス」は知の水源池として地域分散核（ほたる）を生み育てます。

・西側地区等には、九州大学と連携する研究開発機能等の受け皿として複数の「分散型地域核(ほたる)」を整備・誘導し、大学やタウン・オン・キャンパスで育成されたシーズの育成を図ります。

また、良好な環境を活かした研究者村や生活サポート機能を、地形や集落環境に配慮しながら整備・誘導します。

・学術研究都市コアゾーンは、産学民公の連携・協力のもとで、具体化していきます。



【分散型地域核（ほたる）】

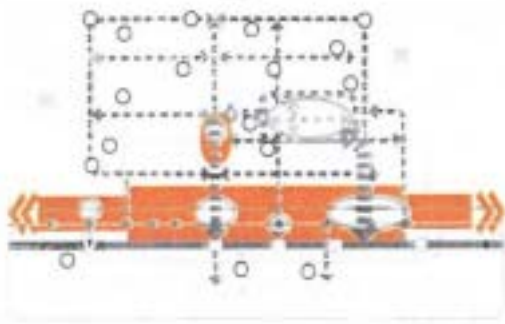
・「学術研究都市コアゾーン」でインキュベートされたプロジェクトや新産業のスピンオフの受け入れ地や、学術研究都市に進出を希望する研究・開発企業等の立地先として、また学術研究都市の新たな居住者のための自然に包まれた住宅地等として「分散型地域核」を配置します。

・「分散型地域核」は、自然環境や農業との調和などを条件とした一定のルールのもとで、「自然農業保全・共生ゾーン」等に、小規模で良質な研究、居住、レクリエーション等の環境共生型の開発として適宜誘導します。

・この、「分散型地域核」は、糸島地域の自然や景観と共生できることを原則とし、緑のなかの清流に舞い、ひかり輝きながら徐々にその数を増していくイメージを大切にするため、「ほたる」と呼びます。

・学術研究都市として今後必要になる機能を“ほたる”で受け入れることにより、「田園ゾーン」等での無秩序な開発を抑制します。



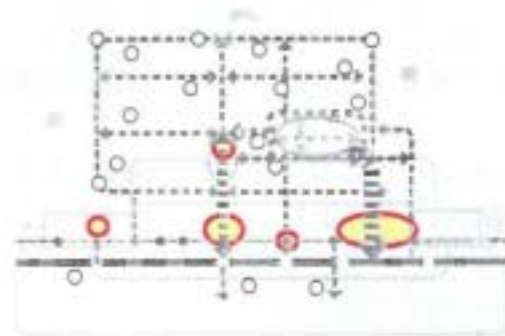


【市街地形成ゾーン】

・東西に走る鉄道・道路の広域交通軸を中心に、都市施設が集積した既成市街地と、これに接する将来市街化が見込まれるゾーンを、「市街地形成ゾーン」と位置づけます。

・福岡～糸島～唐津を結ぶ軸として、商業・業務・サービス機能を充実するとともに、九州大学の移転等による人口増加に対応しつつ、学術研究都市としての新たな機能の立地誘導を図ります。

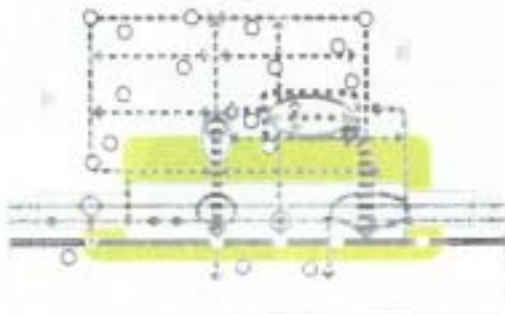
・新たな市街地形成は、需要を見極め、農業との調整を図りながら必要に応じて進め、田園ゾーンへの影響に配慮した低密度の市街地を形成します。



【地域拠点ゾーン】

・「市街地形成ゾーン」の中でも、特に都市機能の集積が高く、地域の中心的役割を果たしているエリア（福岡市新駅周辺地区、波多江、筑前前原、筑前深江、志摩町中心）を、学術研究都市として必要な生活サポート機能を重点的に誘導する「地域拠点ゾーン」と位置づけます。

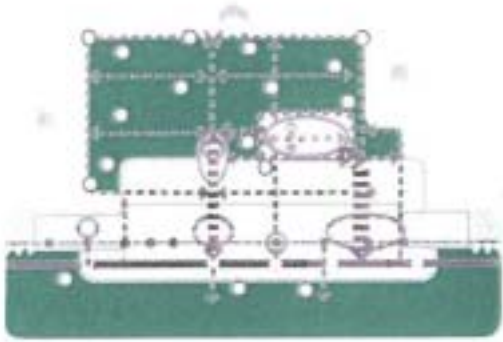
・九州大学や他の拠点との連携を図りながら、商業・業務・サービス機能など地域の生活の中心としての機能に加えて、学生や教職員の居住機能及び研究・開発機能等など学術研究都市に必要な新たな機能の集積を誘導します。



【田園ゾーン】

・「市街地形成ゾーン」と「自然農業保全・共生ゾーン」の間に広がる雄大な田園地帯を、都市圏の貴重な農業を振興すると共に、緑の景観や既存集落の環境を守る「田園ゾーン」と位置づけます。

・都市的土地利用を規制することで無秩序な市街化を防止し、糸島地域を特徴づけるのびやかな田園風景を学術研究都市の財産として維持・保全します。



【自然農業保全・共生ゾーン】

・糸島富士と称される可也山をはじめとする標高 200mを越える山々とその間に広がる農地、及び海岸線からなり、大部分が保安林、農業振興地域内の農用地区域、自然公園等に指定されているゾーンを、現在の自然や農業等の産業、及び既存集落の環境を守る「自然農業保全・共生ゾーン」と位置づけます。

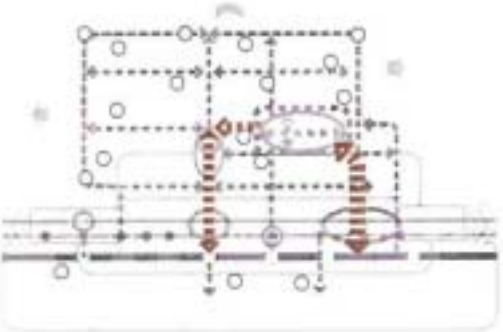
“ほたる”が、成長・増殖し、輝きを増していける清涼な舞台としても位置づけます。

丘陵地・樹林等保全ゾーン

・美しい山並みや海岸線、貴重な生態系等を学術研究都市の環境資源及び景観資源として、関連する自治体や市民の連携・協力により守ります。

保全・整備ゾーン

・現在の土地利用を継続しながら農業の振興を図ることを原則とし、点在する集落環境を保全するとともに、より暮らしやすい環境形成に向けて改善を進めます。



【地域骨格軸】

・福岡市新駅周辺地区～学術研究都市コアゾーン～志摩町中心～前原市中心を結ぶ幹線道路とその沿道を、交通と学術研究都市機能の基幹軸として機能する「地域骨格軸」と位置づけます。

・地元住民の協力を得ながら行政等が中心となって地域拠点をループ状にネットワークする地域骨格軸を形成し、学術研究都市としての機能誘導と、交通の利便性の向上を促進します。

【地域ネットワーク道路】

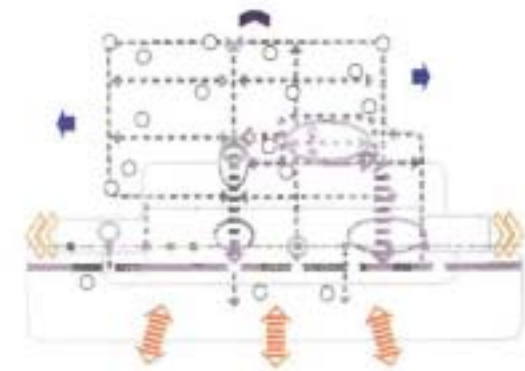
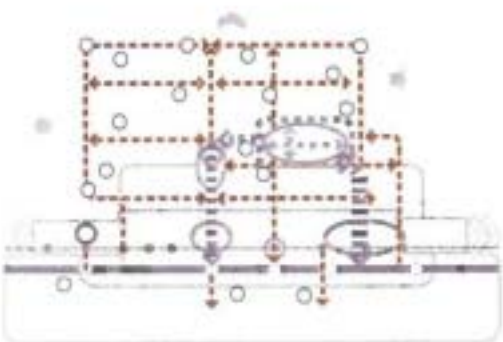
・「地域骨格軸」と連携しながら学術研究都市全体の交通ネットワークの強化を図り、学術研究都市の利便性を向上するとともに、“ほたる”の立地をサポートする道路を「地域ネットワーク道路」と位置づけます。

・地域ネットワーク道路はできるだけ現況道路を活用・改善しながら整備を進めます。

・また、環境にやさしい交通として、自転車ネットワークの整備を進めます。

【広域連携等】











・アジア、世界に向けた情報発信のための基盤整備や、佐賀方面との機能連携のための接続強化、福岡都心部や唐津方面への海上交通等について検討します。

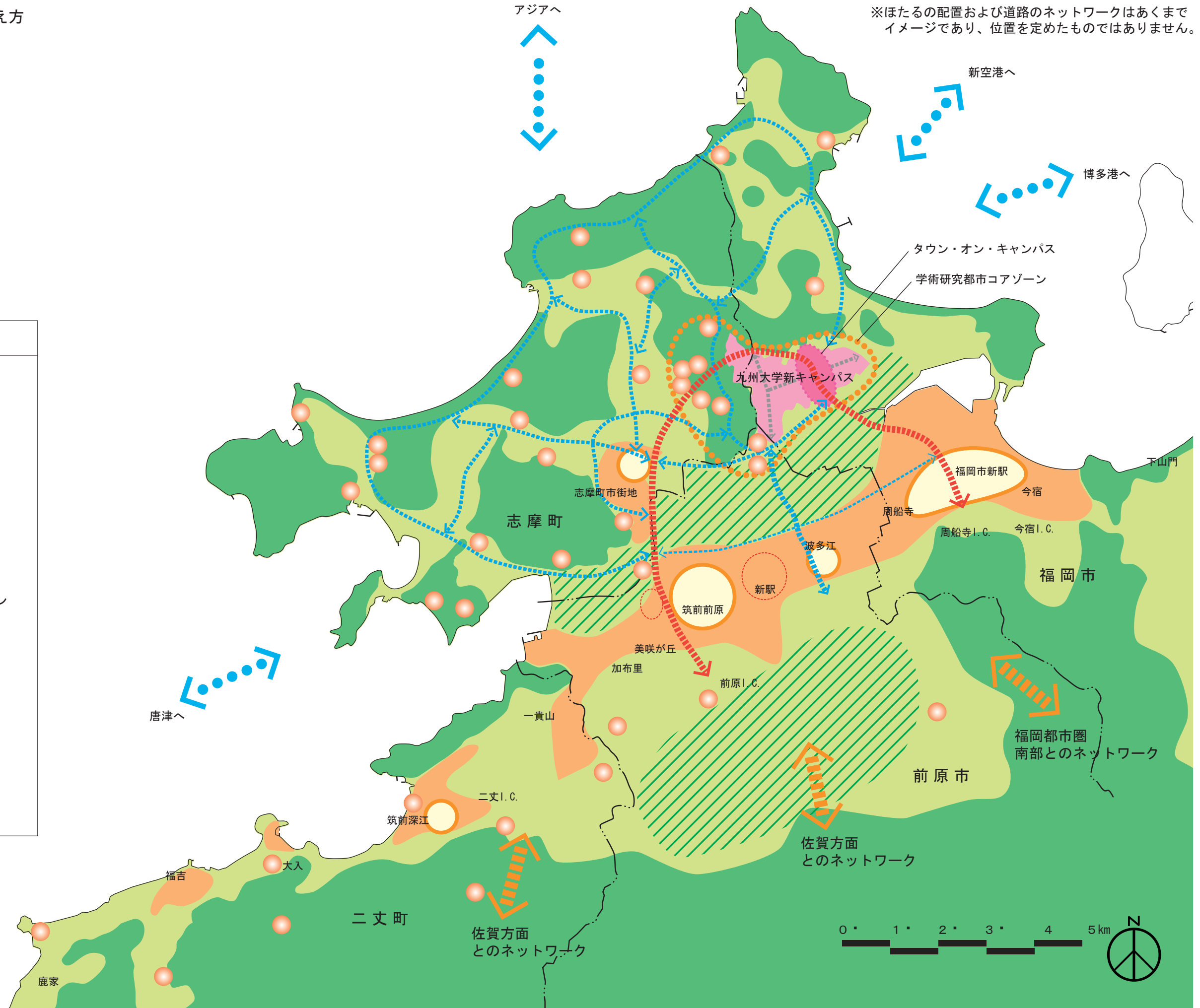


■ 1次圏の空間構成の基本的考え方

※ほたるの配置および道路のネットワークはあくまでイメージであり、位置を定めたものではありません。

凡 例

-  学術研究都市コアゾーン
-  タウン・オン・キャンパス
-  市街地形成ゾーン
-  地域拠点ゾーン
-  田園ゾーン
- 自然農業保全・共生ゾーン
 -  丘陵地・樹林等保全ゾーン
 -  保全・整備ゾーン
-  地域骨格軸
-  地域ネットワーク道路
-  必要に応じて適宜開発を進めるゾーン
-  分散型地域核（ほたる）



3—3 1次圏の整備の考え方

(1) 学術研究都市コアゾーンとタウン・オン・キャンパス

タウン・オン・キャンパスは学内地区と周辺地区で構成し、学術研究都市の中心的な役割を果たし、HSTとして機能します。

① コアゾーンと学園通線沿道地区及び福岡市新駅周辺地区の連携方針

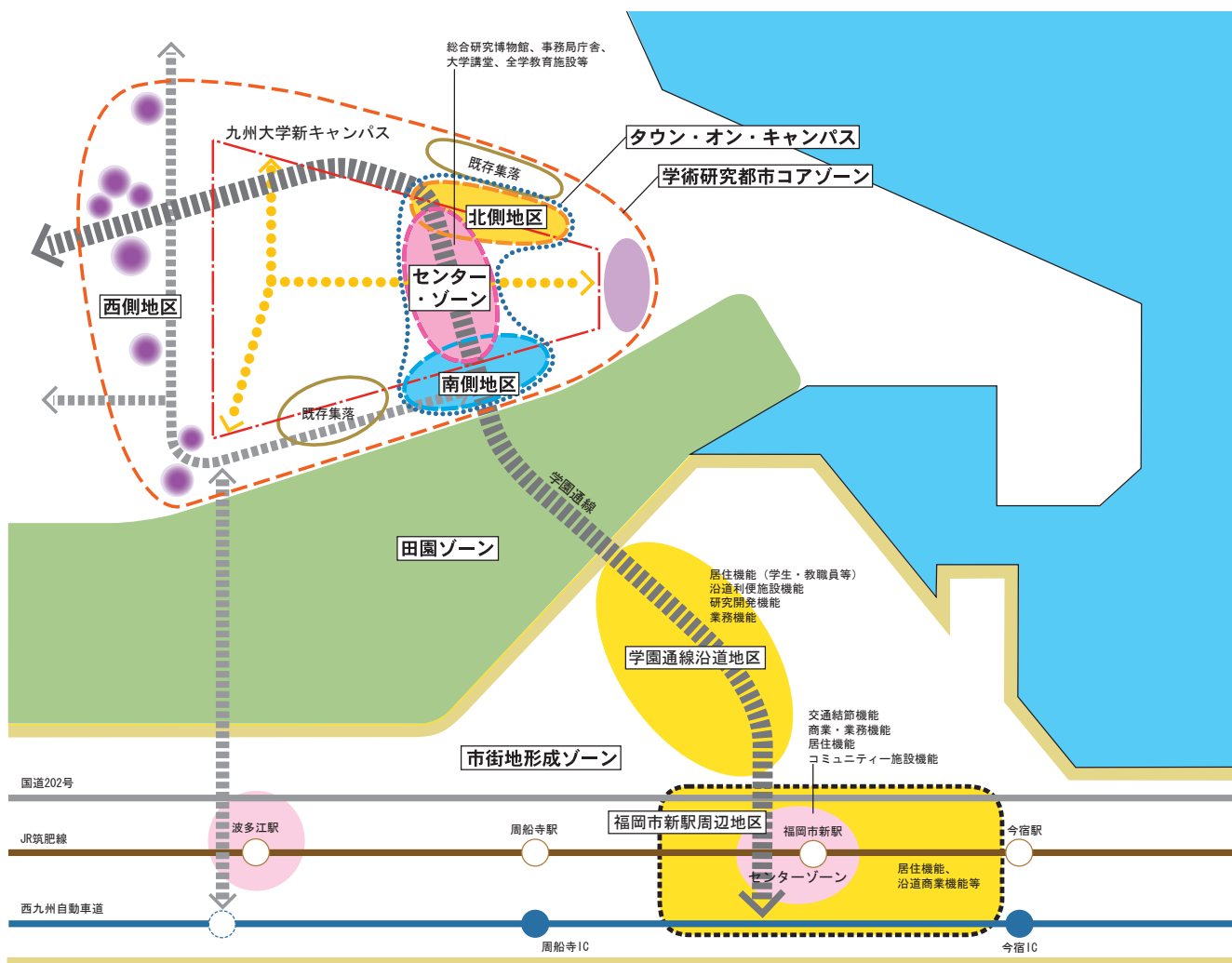
コアゾーンは、九州大学新キャンパスと周辺地区で構成し、学術研究都市のメインゲートである福岡市新駅周辺地区と学園通線で結びます。

タウン・オン・キャンパスは、九州大学センター・ゾーンと一体的に南側地区、北側地区を整備し、研究・開発、居住、生活サポート機能等を整備・誘導し、タウン・オン・キャンパス全体で学術研究都市の中心的なHSTとしての役割を果たします。

西側地区は、地形や集落環境に配慮しながら、研究開発系ほたるや研究者等を対象とした居住系ほる等の誘導を促進します。

学園通線沿道地区では、無秩序な開発を抑制し、農業環境や集落環境の保全を図るとともに、九州大学の移転による各種機能用地の需要を見極めながら、慎重に将来像の検討を進めます。

福岡市新駅周辺地区では、土地区画整理事業を中心としたまちづくりを促進し、商業・業務等の適正な機能誘導を行い、学術研究都市のメインゲートにふさわしいまちづくりを進めます。



■コアゾーンと学園通線沿道地区及び福岡市新駅周辺地区の連携

タウン・オン・キャンパスの機能配置の基本的考え方

タウン・オン・キャンパスを構成する九州大学センター・ゾーンは、「九州大学新キャンパス・マスタープラン 2001」において、国際交流施設、産学連携施設、総合研究博物館等の交流、連携施設を配置し、将来的な民間施設等の誘致を視野に入れた、タウン・オン・キャンパスの中心的機能を担う拠点を形成するとされています。

九州大学新キャンパス・マスタープラン 2001 より

- ・タウン・オン・キャンパスの中心部（センター・ゾーン）には、ビジター・センターとしての機能も備えた総合研究博物館等が配置されます。
- ・また、周辺地域のまちづくりとの連携を視野に入れ、学生宿舎、国際交流会館等の居住・宿泊施設は、センター・ゾーンおよびイースト・ゾーンの北側を中心に配置されます。
- ・学外者との交流や学外からの利用が想定される国際交流施設、研究者交流施設、大学講堂等は、将来的に整備される産学連携施設や地域連携施設も含め、施設相互の連携に配慮しつつ、センター・ゾーンに配置されます。
- ・中央図書館は、全学的な利用や学外からの利用に配慮しつつイースト・ゾーンに、理系図書館は、情報基盤センターとの一体的施設としてウエスト・ゾーンにそれぞれ配置されます。

「九州大学新キャンパス・マスタープラン 2001」を踏まえながら、学内地区と一体的に大学周辺の北側地区、南側地区を整備し、各機能立地を誘導することによって、タウン・オン・キャンパス全体として、集積効果による利便性の確保と利用増進及びにぎわいの創出を図ります。

周辺地区での機能配置にあたっては、学内地区の機能面での充実を図ることを優先しつつ、学生生活の観点の重視や周辺集落への影響等を考慮しながら、センター・ゾーンの機能を補完・支援するため北側地区及び南側地区を整備・誘導します。

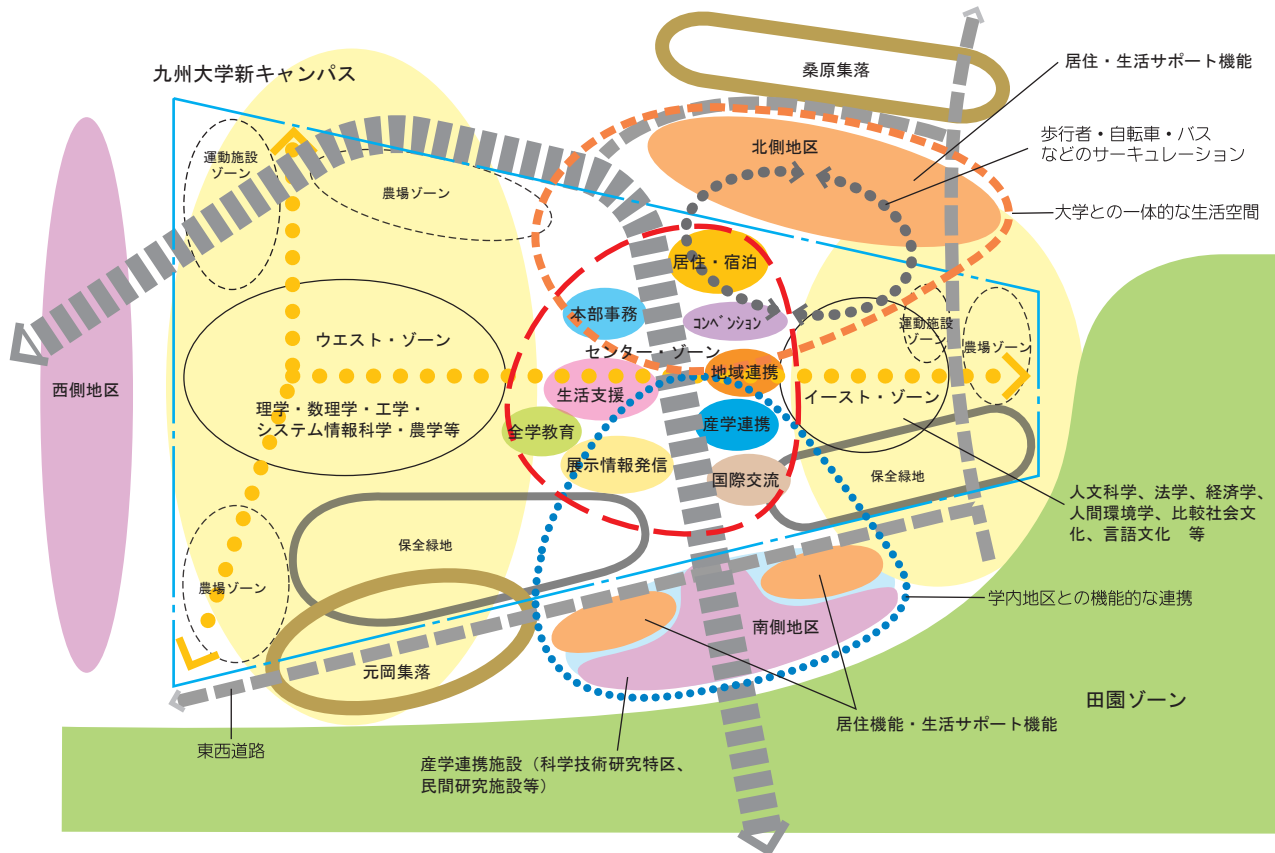
大学の移転にあわせて整備が必要な居住施設や利便施設等の生活機能は、大学内の居住・宿泊施設との一体化、地域との調和及び地区の賑わいの演出効果に配慮し、北側地区を中心に北・南側に配置します。

南側地区は大学のフロント部にふさわしい空間形成を図り、大学地区と補完・連携した研究機能や産学連携機能等の戦略的な機能を主として誘導します。

③ タウン・オン・キャンパス（周辺地区）の整備の基本的考え方

タウン・オン・キャンパス（周辺地区）は、大学キャンパス内センター・ゾーンや福岡市新駅周辺地区等との連携を図り、産学連携機能や居住・生活サポート機能の集積空間として、学術研究都市のシンボリックな役割を持たせつつ、短・中期に計画的な基盤整備及び施設立地を図る必要があります。

タウン・オン・キャンパス（周辺地区）では、大学移転のスケジュールに合わせながら、研究・開発機能用地の確保、学生や教職員等を対象とした住宅供給や利便施設の充実を図ります。また、既存集落との連携・協力を図りつつ、地区計画等の環境の質を高める一定のルールのもとで、民間活力を生かしながら学術研究都市にふさわしい空間を創出していきます。



■タウン・オン・キャンパスの整備のイメージ図

《産学民公連携機能等の集積誘導》

九州大学新キャンパス・マスタープラン2001では、大学が初期段階からタウン・オン・キャンパス（学内センターゾーン）に学術研究都市を先導する産学連携機能等の施設整備を進める計画になっています。

周辺地区は、学内でインキュベートされた新産業等研究開発成果によるスピノフの場づくりを進め、産学連携促進のトリガーとなるプロジェクトや産業の大学直近の受け皿とします。

また、H S T機能の拡充・展開により学内の立地が困難な機能の受け皿の整備も進め、大学内センター・ゾーンと周辺地区による一体的なH S Tとして育成していきます。

タウン・オン・キャンパスは、大学・民間・行政及び地元の協力・連携のもとで実現を目指します。

《居住及び生活サポート機能の整備》

居住及び生活サポート機能については、大学関連居住機能の受け皿として、初期段階から計画的な整備・誘導を進めていく必要があります。

タウン・オン・キャンパスの居住及び生活サポート機能は、ライフスタイルの多様化、ユニバーサルデザイン、サステナビリティへの対応など次世代のまちづくりに求められる基礎的な条件に加えて、学術研究都市として独自のテーマを掲げて整備を進めます。

学術研究都市独自のテーマ

- ・ 利便性が高く快適なキャンパスライフを支える学生街の整備
- ・ 外国人にも住みやすい環境整備
- ・ 環境への負荷を軽減する地域交通システムの検討（カープール、カーシェアリング、自転車ネットワーク）
- ・ 省エネ、省資源、水循環、リサイクル、自然共生（ビオトープ、地形を活かした造成等）など環境共生システムの導入

九州大学に学ぶ学生のための新たな居住地づくりに関しては、将来の学術研究都市の主役となる人材が快適に学び、住み、楽しめる知・住・悠を体感できる空間としての整備を目指し、九州大学や学術研究都市の愛着や魅力を高める装置とします。

計画的な整備により高環境の居住地づくりを進めます

- ・ 高い住環境の提供（道路・公園等の基盤施設、日照、緑、駐車場、景観等）
- ・ 高い利便性の確保（ミニスーパー、コンビニ、各種レンタルショップ、飲食店等）

将来の研究者を育てる装置としての学生居住施設づくりを進めます

- ・ 光ファイバー等の整備による情報化への対応（大学と直結した情報システム等）
- ・ 留学生との交流等をベースとした語学修得等による国際人の育成（集会所やセミナールーム等）

楽しく刺激的な大学生生活の場づくりを進めます

- ・ 九州大学のアイデンティティを醸成する施設づくり（学生街祭りへの対応、交流ルーム、パブ等）
- ・ 多様な文化を深める装置づくり（クラブハウスやミニホール等）

地域と共存できる学生街づくりを進めます

- ・ 周辺集落への日照や景観上の配慮（建物の配置や高さ、デザインへの配慮等）
- ・ 地域との交流を活性化する共同利用施設の整備（集会所、公園等）

《参考》大学周辺における学生居住のイメージ

● 空間構成のイメージ

- ・ 隣棟間隔を適切に保ち、日照を確保すると共に、空間的な余裕と豊かな緑のスペースを生み出します。
- ・ 公園や広場などを適宜配置し、学生相互、学生と地元の人々の憩いやコミュニティの空間とします。
- ・ 既存集落に近いエリアは低層建物を配置するなど、集落への日照や景観面での配慮を行います。
- ・ 適正量の駐車場の確保に加えて、カーシェアリングシステム等を導入するなど、交通負荷の軽減を図ります。
- ・ 学内地区と機能分担しながら、各種便利施設を配置し、学生・教職員や地元の人々の利便性を高めます。
- ・ 独立又は住棟に組み込む形で、集会所、セミナールーム、クラブハウス、ミニホール、パブ等を配置し、大学生活を豊かで刺激的なものとしします。
- ・ 通学路など、地元の人々も安心して歩ける歩行者の動線を整備します。

● 居住施設のイメージ

- ・ 低層～中層～高層住宅など多様な形態の住宅を整備し、様々な需要に対応します。
- ・ プライバシー重視型のマンションタイプに加えて、共有空間となるロビーを持った寮型、セミパブリックな中庭を持つコートハウス型など、コミュニティを育む住み方も可能な住宅タイプの導入を検討します。
- ・ 女性専用住宅、シェアードタイプ住宅などの配置も検討します。



■ 学生居住のイメージ

(2) 分散型地域核“ほたる”

分散型地域核“ほたる”誘導のねらい

糸島地域の豊かな自然や歴史の特性を十分に保存、活用して学術研究都市を形成するため、「自然農業保全・共生ゾーン」において大規模な面開発を必要最小限にとどめ、周辺環境と必要な機能が共生した比較的小規模な開発が分散して行われるように開発誘導します。このように行われる環境共生型の開発を分散型地域核“ほたる”として位置づけます。

“ほたる”は、学術研究都市にふさわしい良好な居住環境・生活環境を提供する21世紀の地域整備のモデルとして、九州大学を中心とした学術研究都市の1次圏内の丘陵地を基本に数haから数十haの規模で徐々に展開します。その展開域は学術研究都市の熟成に併せ、2次圏にも拡大していきます。これらの1次圏から2次圏の唐津・浜玉に至る地域は、玄界灘に面した自然海岸や可也山、雷山、鏡山等の山地・丘陵、雷山川と瑞梅寺川流域の田園及び農村集落、JR筑肥線及び国道202号沿線の市街地などで構成されています。これらのダイナミックで人々を和ませる景観を保存・整備するため、小規模で分散型の開発を行っていきます。

“知の中央ステーション：HST”からスピノフする多様な企業活動や実験的なコミュニティ創造活動を展開する場としての“ほたる”は、地域の自然、歴史、景観、生活と共生し、光り輝きながら、学術研究都市機能を実現し、その活動を支えていきます。

分散型地域核“ほたる”の機能

“ほたる”の開発に当たっては、土地利用を特定の機能に特化させることなく、その機能をできる限り複合化することによって、職住近接を実現するとともに、昼夜を通じて活気ある街並みを形成します。

“ほたる”の機能として、九州大学の高度で多様な研究開発機能と連携した「研究系」、大学教職員や研究者あるいは地域の魅力に惹かれた住民などが自然環境と共生しながら生活する「居住系」、これらの研究開発機能や人材を活用して高付加価値の生産活動を行う「工業系」、半島地域の恵まれた自然や歴史とふれあいながらリフレッシュする「レク系」などが想定され、これらの機能が研究・居住や研究・レクなど複合的に展開することによって、にぎわいや知的コミュニティの形成が促進されることも期待されます。

“ほたる”の機能例

研究系	省エネルギー・資源リサイクル研究開発施設、24時間対応型研究開発施設、九州大学等の知的資源を活かした研究施設 他
居住系	田園居住型住居、節水・省エネルギー（環境共生型）施設、菜園・農園の確保 他
工業系	研究開発支援・試作加工施設、省エネルギー・資源リサイクル産業施設、地場産業育成施設 他
レク系	アトリエ等併用住宅、長期滞在型宿泊施設、リタイアメント住宅・別荘、研修施設、保養施設 等の施設周辺環境との調和

分散型地域核“ほたる”開発のルール

“ほたる”開発を誘導する地域は、1次圏では「自然農業保全・共生ゾーン」とします。「市街地形成ゾーン」や「田園ゾーン」での立地は、基本的に誘導しないこととします。市街地形成ゾーンは、開発を抑制するものでなく、各種機能が面的に立地するため、分散型地域核“ほたる”の形状とならないものです。

「自然農業保全・共生ゾーン」においては、分散型地域核“ほたる”と認められない開発については、厳しく抑制する必要があります。このため、“ほたる”として開発が認められる条件をあらかじめ明らかにすることによって、“ほたる”開発を誘導するとともに、それ以外の開発を規制することが必要となります。また、ゾーン内に散在する農村集落等と“ほたる”が一体化あるいは連携することによって、田園居住の実現と集落環境の整備・活性化を行います。

その条件の詳細は、当構想の実現を図る過程で具体的に検討する必要があります。ここでは、基本的な考え方を整理しました。この考え方の中には、実現には関係者の合意形成が必要なことなどから直ちに実現できないものや、“ほたる”が各地に展開していく過程で見直しが必要なものもあります。

学術研究都市として相応しい機能立地

九州大学の研究開発機能と連携した研究系及び工業系の施設、留学生や外国人研究者向けの高いレベルの居住環境を備えた住宅、及び、居住者や来客者が交流し、またリフレッシュするためのレクリエーション施設など、学術研究都市に相応しい機能立地を促進する開発を進めます。

植生の維持・保全

開発区域内に一定率以上の残存緑地を確保するとともに、ミティゲーションなどを行うことにより可能な限り高い緑被率を確保した開発を進めます。特に、造成法面については、最小限とし、基本的に在来種による緑化を行います。

バリアフリー

高齢者や障害者も含め誰もが快適で便利な活動を行える基盤及び施設の整備を進めます。また、外国人居住者や来街者を考慮した共通のサインシステムやインフォメーションシステムを構築します。さらに、“ほたる”内に自由に出入りできるように、ヘイ、柵などの設置を廃するとともに、立地する各種施設についても公開空間の整備を行います。

交通負荷の軽減

学術研究都市内の自動車交通利用を最小とするよう、“ほたる”内の機能配置や“ほたる”の配置を工夫することによって、職住近接を実現します。歩行や自転車での移動を快適にするための空間整備や緑化などを行うとともに、情報システムを活用したデマンド・バスシステムなど、分散した“ほたる”に対応した公共交通機関の開発・整備を行います。

建築物のデザイン配慮等

建ぺい率や容積率を可能なかぎり低くするとともに、建築物の高さも周辺の樹木以下に抑えることによって、半島全体の眺望を保全します。また、屋外広告物についても厳しく規制します。

施工時の環境配慮

開発に先立ち自然環境調査等を実施し、自然環境の保全策を検討するとともに、切り土・盛り土量を調整し、造成残土の発生を抑制します。移植する在来植生や発生残土については、“ほたる”間での斡旋・流用を行います。

コミュニティの維持・拡大

“ほたる”内外及び既存集落との交流や連携が活発に行われるような、開発計画上の配慮や様々な活動の支援を行います。

分散型地域核(ほたる)整備の手法

“ほたる”立地を誘導する地域のうち、福岡市及び前原市域については、現在都市計画法に基づく市街化調整区域になっています。志摩町域については、現在市街化区域と市街化調整区域の区域区分の都市計画決定の手続き中であり、決定後は1次圏の「自然農業保全・共生ゾーン」内では一定規模以上の開発のみが開発許可されることとなります。

この市街化調整区域の開発許可の運用を農業振興地域の整備に関する法律や森林法の運用とも連動させ、“ほたる”開発のルールに即して行うとともに、建ぺい率・容積率の指定を当面は可能な限り低いものにしておき、先進的な“ほたる”に関しては必要に応じて緩和することが考えられます。

また、市街化調整区域内の地区計画制度を活用して、“ほたる”開発を誘導します。あわせて、地区計画の方針を予め決定することにより、実現可能な開発を事前に確定し、周知しておくことや、地権者等による地区計画の案の申し出や地区整備計画の策定要請等の制度を活用することによって、柔軟な運用を行います。

さらに、農村・農地整備の手法も活用して、農地の保全も行いつつ、“ほたる”開発を進めます。将来的には、地方分権の動きも踏まえ、新たな農村・都市一体の整備手法や立地誘導手法も念頭に“ほたる”と自然・農業が共生した開発を進めます。

以上のような制度運用は、県及び市町の複数の組織に関係するものであり、また九州大学を中心とした学術研究都市の機能立地政策との連携も不可欠であることから、学研都市圏内において共通かつ柔軟な運用が必要となります。このため、“ほたる”開発の管理のための新たな組織として、圏内において「(仮称)いとしま計画連合」を提案します。(詳細4章参照)

“ほたる”の開発・整備の実現手法(例)

緑被空間の確保	・地区計画あるいは建築協定による緑地率指定 ・緑地協定の締結
自然・樹林等の保全	・地区計画、建築協定による保全地域の指定
省エネルギー対策	・節水型住宅の普及推進(啓発、助成制度) ・パッシブ、アクティブソーラーハウスの促進
資源リサイクル対策	・建築廃材リサイクル、廃棄業者への補助 ・地域内分別収集の徹底、リサイクルプラント、研究機関等の誘致・連携
地域産業の育成	・地域木造住宅建設補助制度等制度利用
低層低密度開発の誘導	・地区計画制度等活用(最高高さ制限、容積率低減、敷地最低限度、壁面後退等)、建築協定の締結
農村・都市一体整備	・集落整備法に基づいた農村・都市一体整備
菜園・農園の確保	・農業機関連携
学生向け居住施設	・農地所有者等賃貸住宅建設の利子補給制度の活用
アトリエ等併用住宅、長期滞在型宿泊施設、ワイルド住宅整備	・優良田園住宅の供給 ・農地所有者等による定期借地権付住宅や賃貸住宅の供給 ・地区計画制度の活用
公園の整備	・まちづくり条例に基づく整備
別荘、研修施設、保養施設等	・地区計画制度の活用
インフラ整備	・交通バリアフリー法に基づいた整備

参考資料／“ほたる”開発・整備のイメージ(居住系)

《現況》

- ・地形は緩やかな西向き斜面で、日当たりも良好で、丘陵地の一部はかつて果樹園として利用されていました。
- ・敷地東側は丘陵地、西南北側は農地やビニールハウスに囲まれています。また、北側には農家を中心とした既存集落があります。
- ・既存幹線道路から敷地までは一部進入路の新設が必要ですが、アクセスは容易です。

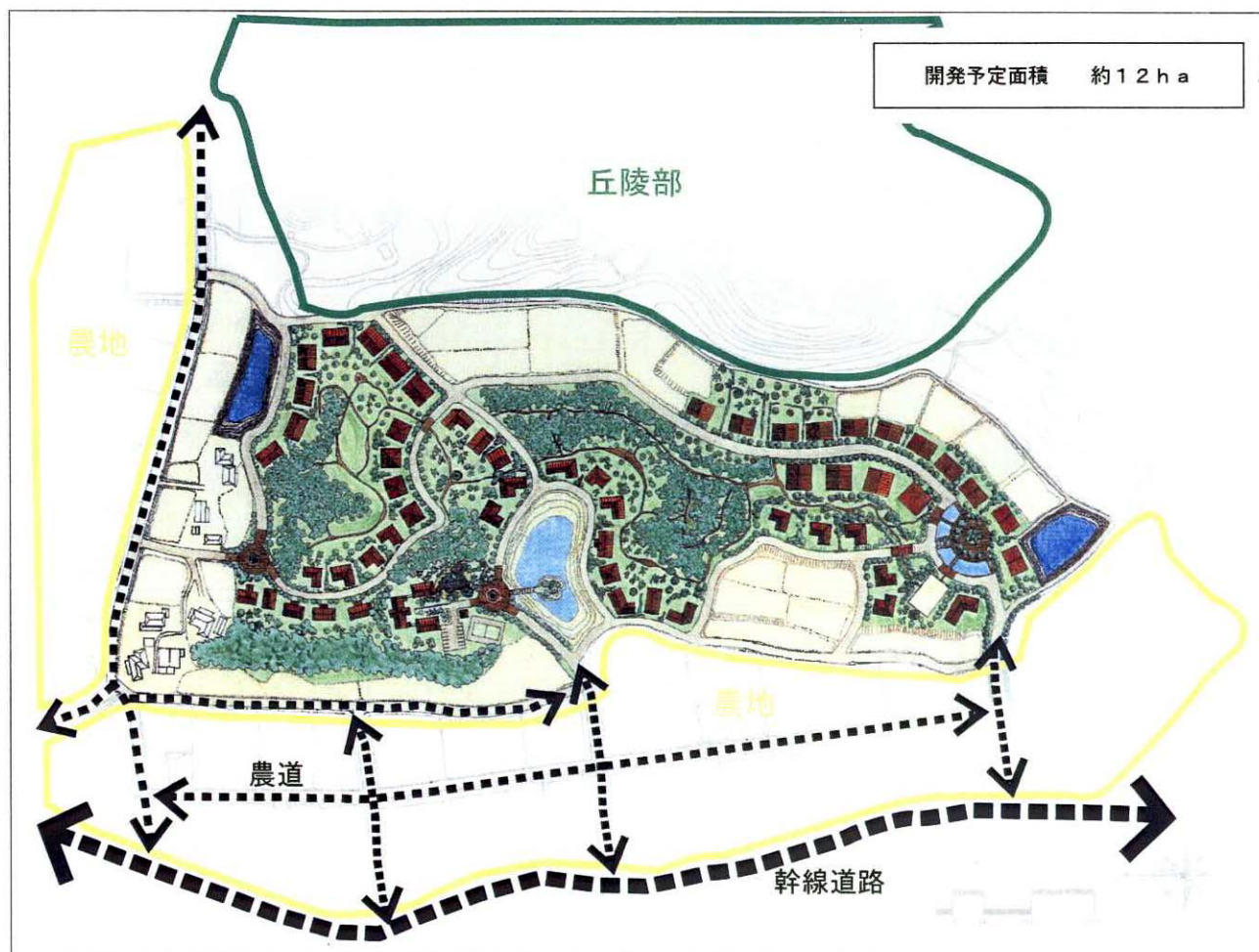
《開発テーマ及び施設構成》

○開発テーマ

- ・自然の恵みを生かし、自然の環境を楽しむことができる、農業活動に対応した郊外居住拠点を創出します。

○施設構成

- ・九州大学や研究所、民間企業などの研究開発施設あるいは既存市街地などからの住宅ニーズに対応したファミリー世帯のための住宅を導入します。
- ・周辺の自然環境に配慮し、環境共生型の優良田園住宅、省エネルギー型住宅、菜園付き住宅などによる低層低密度住宅地の形成を目指します。
- ・居住した人たちが利用する集会施設などの共用施設の整備、及び自然の恵みを生かした田畑、果樹園など、農地の活用を目指します。



参考資料 / “ほたる” 開発・整備のイメージ(研究系)

《現況》

- ・九州大学にもっとも近く、幹線道路に接していますが、周辺は樹林に囲まれた谷あいの地区です。
- ・また、周辺には、既存の中規模の工場などが分布しています。

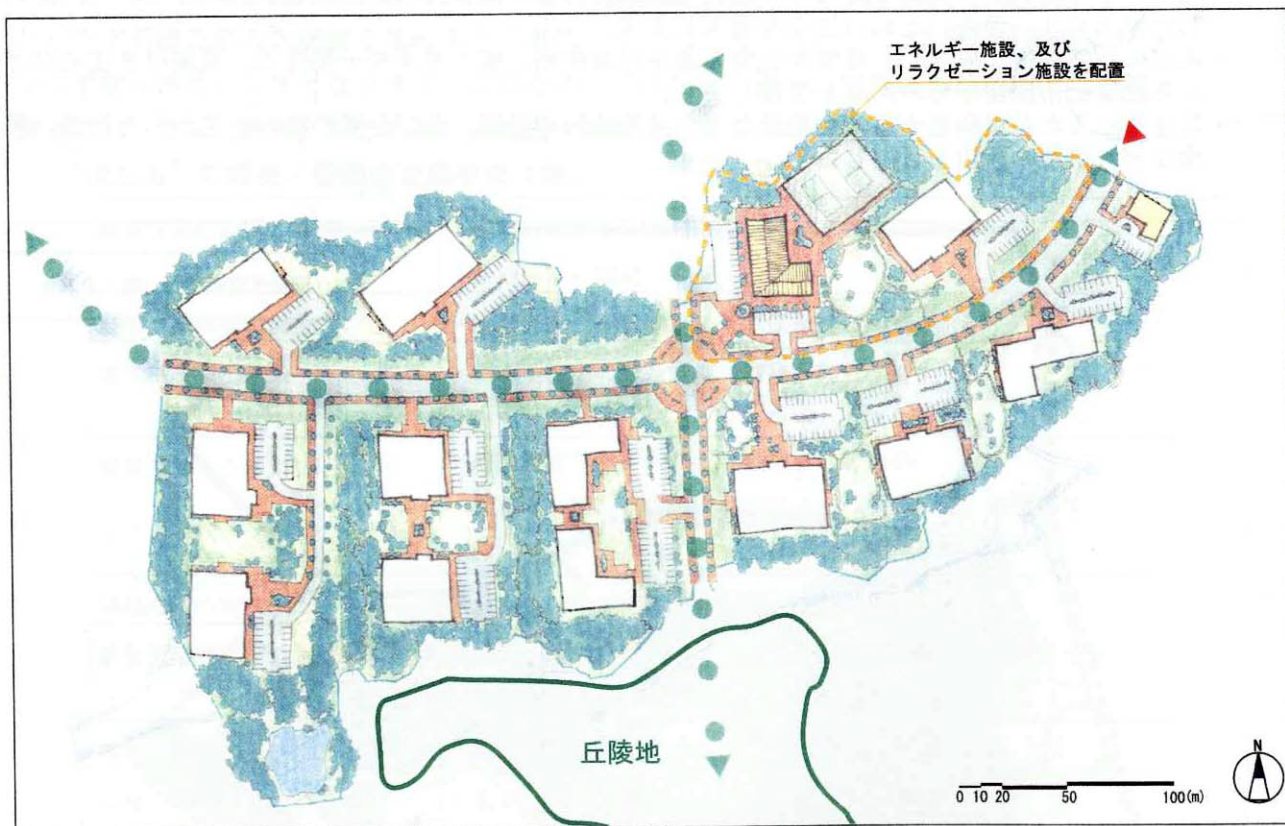
《開発テーマ及び施設構成》

○開発テーマ

- ・自然の緑や地形を生かし、環境と共生する研究開発拠点を創出します。

○施設構成

- ・九州大学の研究開発機能、あるいは農業生産等とも連携した研究開発施設を導入します。
- ・エネルギー施設、公園緑地、リラクゼーション施設などの共用施設を導入し、研究開発施設群とともに九州大学と連携していきます。



開発予定面積 約8ha

参考資料／“ほたる”開発・整備のイメージ(リゾート系)

《現況》

- ・海岸沿いを通る幹線道路に接し、海に向かって西向きに開けた平坦な敷地です。
- ・西側以外は山に囲まれ、敷地南側は小丘陵に接しています。
- ・敷地周辺には漁港等を中心に小規模集落が分布しています。

《開発テーマ及び施設構成》

○開発テーマ

- ・リラクゼーション機能、ケア（もしくは療養）サービス機能を備え、自然の環境を楽しみながら生活できるリゾート居住の拠点を創出します。

○施設構成

- ・高齢者、定年退官後の研究者、趣味の共通する家族・グループが互いに助け合い、はげまし合いながら、楽しく気軽に生活できるコレクティブハウス等を導入します。
- ・また、ケア（もしくは療養）サービスセンターやギャラリーなどの共用施設も導入します。



開発予定面積 約4ha

《現況》

- ・九州大学に近接し、大学と既存市街地の中間に位置する地区です。
- ・概ね丘陵地からなり、丘陵地の一部はかつて果樹園として利用されていました。また、敷地は一部既存集落や農業用ため池に接しています。

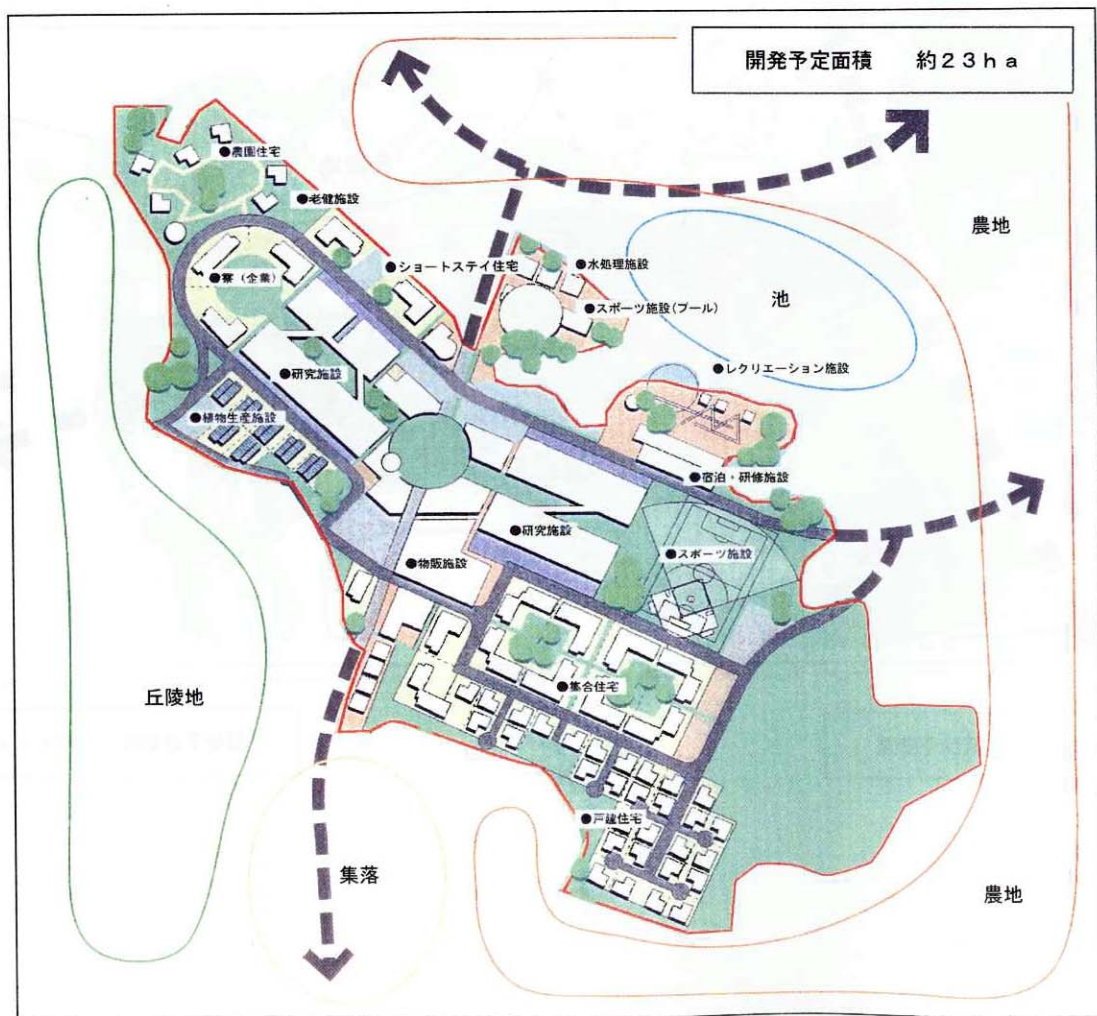
《開発テーマ及び施設構成》

○開発テーマ

- ・恵まれた立地条件を生かし、多様な機能が複合化した環境と共生する“ほたる”を創出します。
- ・地域の省エネルギー対策、環境負荷対策の視点からガス供給事業、リサイクル事業を柱とした地域へのエネルギー（ガス、電気、熱）供給を効率的に進めます。また、エネルギー供給の過程で創り出される資源を有効に活用し新規事業を育成します。

○施設構成

- ・大学施設を連携する研究・研修施設の誘致を進め、産業界の技術向上、地域の昼間人口の安定化を目指します。
- ・環境共生を主眼に大学施設と連携した各種医療・福祉系住宅群、学生向け住宅群、研究者向け住宅群を整備し、永続性を備えた居住環境を創出します。



(3) 市街地形成ゾーン及び地域拠点ゾーン

ゾーンの位置づけ

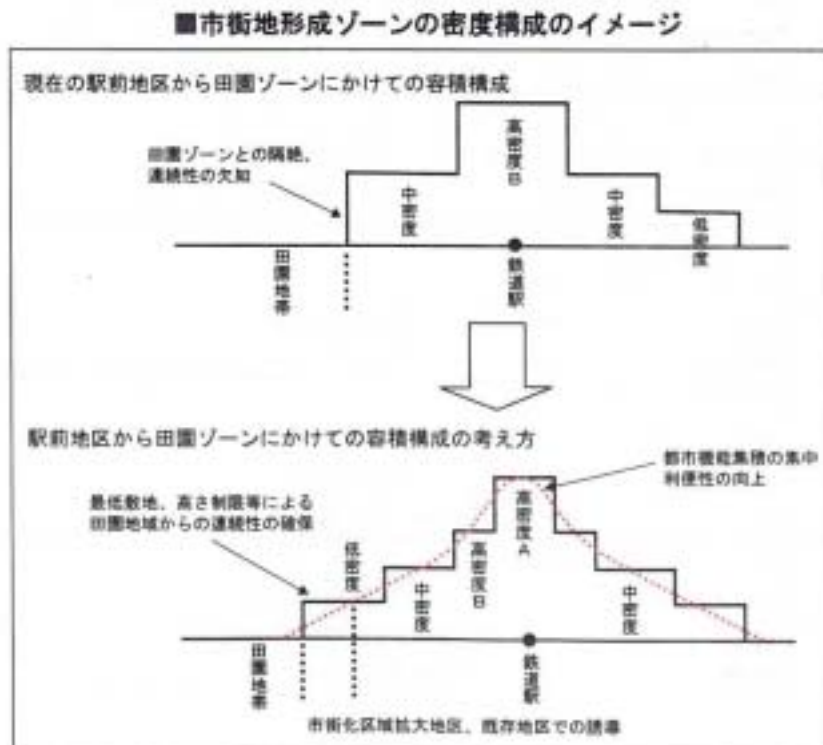
市街地形成ゾーンは、学術研究都市を東西に通る広域交通軸であるJR筑肥線及び国道202号の沿線に形成された福岡市西区、前原市、二丈町の各市街地及び志摩町の中心市街地を対象に、既存の都市機能の集積を生かした良好な環境のまちづくりを行うゾーンです。また、既成市街地の土地利用の合理化と高度化、田園ゾーンと調和した良好な環境の市街地形成を図るゾーンとして位置づけます。

このうち、地域拠点ゾーンは、九州大学等と連携して多様な都市機能・学術関連機能・学生等居住機能の集積を図り、魅力ある学術研究都市の形成を図る拠点となる地区で、福岡市の新駅周辺地区、前原市の波多江地区及び前原地区、志摩町の志摩地区、二丈町の二丈地区を位置づけます。この地域拠点ゾーンは、都市あるいは地域の中心に位置し、交通便利性が高く、計画的な土地利用の高度化を図ることにより、魅力ある良好な中心市街地を形成すべき地区です。各地域拠点は、拠点間並びに九州大学と相互に連携することにより、学術研究都市の機能を高める拠点として魅力ある地区の形成を目指します。

市街地形成ゾーン整備の基本的考え方

市街地形成ゾーンでは、既成市街地における計画的な土地利用の更新、整序を図るとともに、住みよい環境の住宅市街地の形成を図ります。また、将来の需要を見極めながら、田園ゾーンと隣接する区域においては、田園ゾーンと調和した計画的な宅地化を誘導し低密度住宅市街地を形成することにより、まとまりのある市街地の形成を図ります。

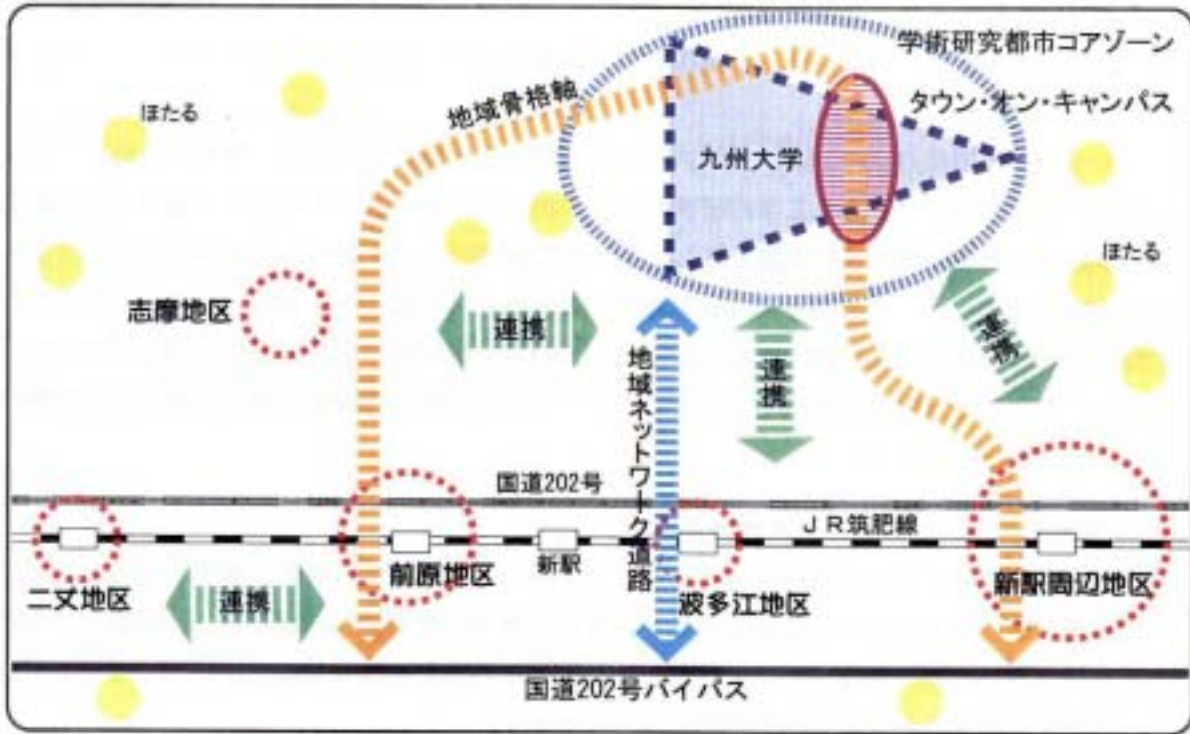
さらに、既成市街地では、合理的土地利用を図るべき地域核(福岡市新駅周辺地区、波多江地区、前原地区、二丈地区)を中心に高度化を推進し、高密度から低密度へとなだらかな土地利用の実現を図ります。



地域拠点ゾーン整備の基本的考え方

各地域拠点ゾーンについては、各拠点の特性を踏まえ、次のような個性と魅力にあふれた地区としての形成を目指します。

■地域拠点ゾーンの整備方針

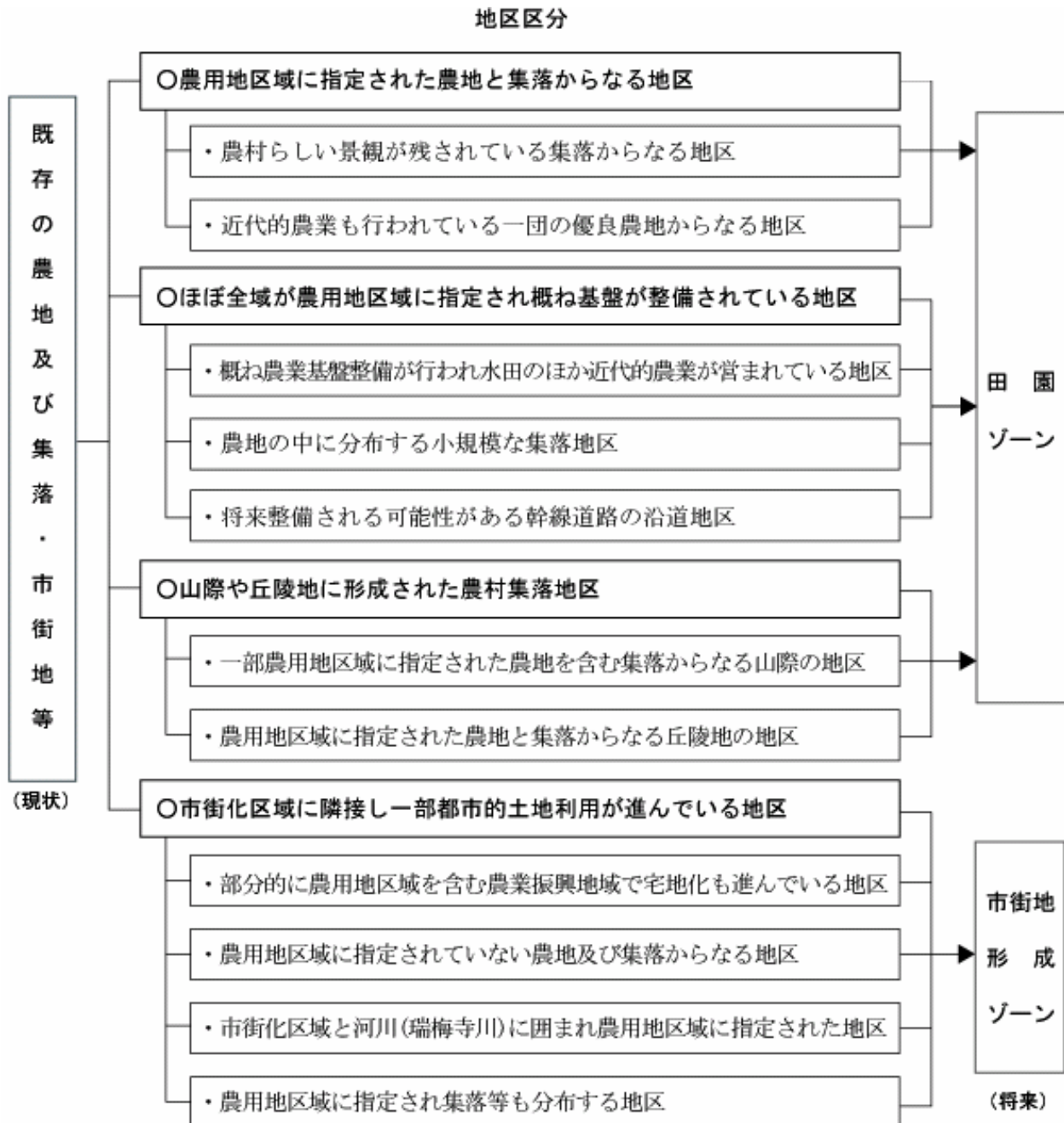


福岡市新駅 周辺地区	福岡市新駅周辺 学術研究都市の東のメインゲート 学術研究都市にふさわしい商業、行政サービス機能等の高次都市機能の充実 交通結節機能整備、商業・業務・行政サービス機能等の導入 大学・企業・市民との交流と文化的活動を支援する文化・交流拠点の形成
波多江地区	J R波多江駅周辺 商業・飲食などの生活サービス機能の充実 九州大学関連施設(留学生用施設、居住施設等)の誘導
前原地区	J R筑前前原駅周辺 学術研究都市の西のメインゲート コンベンション機能、商業・飲食・娯楽などのサービス機能の充実 都市の中心となる行政・公益施設等の住民サービス機能の集積
志摩地区	志摩町初地区中心 商業・飲食などの生活サービス機能の充実 都市の中心となる行政・公益施設等の住民サービス機能の集積 九州大学関連施設(居住施設等)の誘導
二丈地区	J R筑前深江駅周辺 商業・飲食などの生活サービス機能の充実 都市の中心となる行政・公益施設等の住民サービス機能の集積 九州大学関連施設(居住施設等)の誘導

(4) 田園ゾーン

田園ゾーンの位置づけ

市街地形成ゾーンと九州大学新キャンパスや山地の間に広がる雄大な農地、集落、市街地等からなる区域は、次のような4つの地区に区分されます。このうち、「農用地区域に指定された農地と集落からなる地区」「ほぼ全域が農用地区域に指定され概ね基盤が整備されている地区」及び「山際や丘陵地に形成された農村集落地区」については、将来とも都市的土地利用を規制し、農業の振興、田園景観の保全を図るべき田園ゾーンとして位置づけ、保全していきます。一方、「市街化区域に隣接し一部都市的土地利用が進んでいる地区」については、将来の需要を見極めながら田園ゾーンと調和した計画的な宅地化を誘導し、低密度住宅からなる市街地ゾーンとして市街地形成を検討します。



将来土地利用の基本的考え方

将来とも優良農地、集落や田園景観からなる田園ゾーンとして保全していく地区では、将来の市街化圧力に対処しつつ、農業・農村地域としての特性を保持していくため、次のような土地利用の方向を目指します。

〈一団の優良農地の保全・振興、既存集落の維持〉

ゾーンの大半を占める農地及び既存集落においては、一団の優良農地の保全、農業の振興及び既存集落の維持を図ります。

〈集落活性化等秩序ある土地利用の誘導〉

九州大学新キャンパスに隣接する集落、農地の環境を保全しつつ、活性化を図るために必要な計画的な宅地化を実現する“ほたる”の誘導を図ります。

〈九州大学フロント地区としての計画的宅地の誘導〉

新たに整備される九州大学関連幹線道路で九州大学新キャンパスに接した地区で九州大学との機能分担、連携を前提とした計画的な土地利用を誘導します。

〈幹線道路沿道での都市的土地利用の規制〉

新たに整備される幹線道路の沿道のうち、一団の優良農地(=農用地区域)の中で整備される区間では、沿道での都市的土地利用を原則的に規制します。

また、将来的には、市街地形成ゾーンとして計画的な土地利用転換を図っていく地区についても、現在の土地利用を踏まえ、次のような土地利用の方向を目指します。

〈既存市街地と連携した新市街地の形成〉

ゾーン南側の駅を中心とし市街地としての奥行きが狭い市街化区域に隣接した農地で計画的・面的基盤整備を前提とした新たな市街地の形成、都市的土地利用を図ります。

〈良好な低中密度市街地の形成〉

学園通線の整備、市街化区域での新駅整備と計画的市街地形成により開発圧力が高まる瑞梅寺川以東での良好で低中密度の市街地を形成します。

〈田園型居住地としての修景・整備〉

農村集落と農用地区域指定の農地等からなる瑞梅寺川以東での優良農地の保全、農業振興及び集落環境や景観の保全と宅地化による集落の活性化を図ります。

〈幹線道路沿道での土地利用の規制・誘導〉

新たに整備される幹線道路の沿道のうち、市街化が予想される区間で整備される道路沿道では、メインアクセス道路にふさわしい沿道土地利用の規制・誘導を図ります。

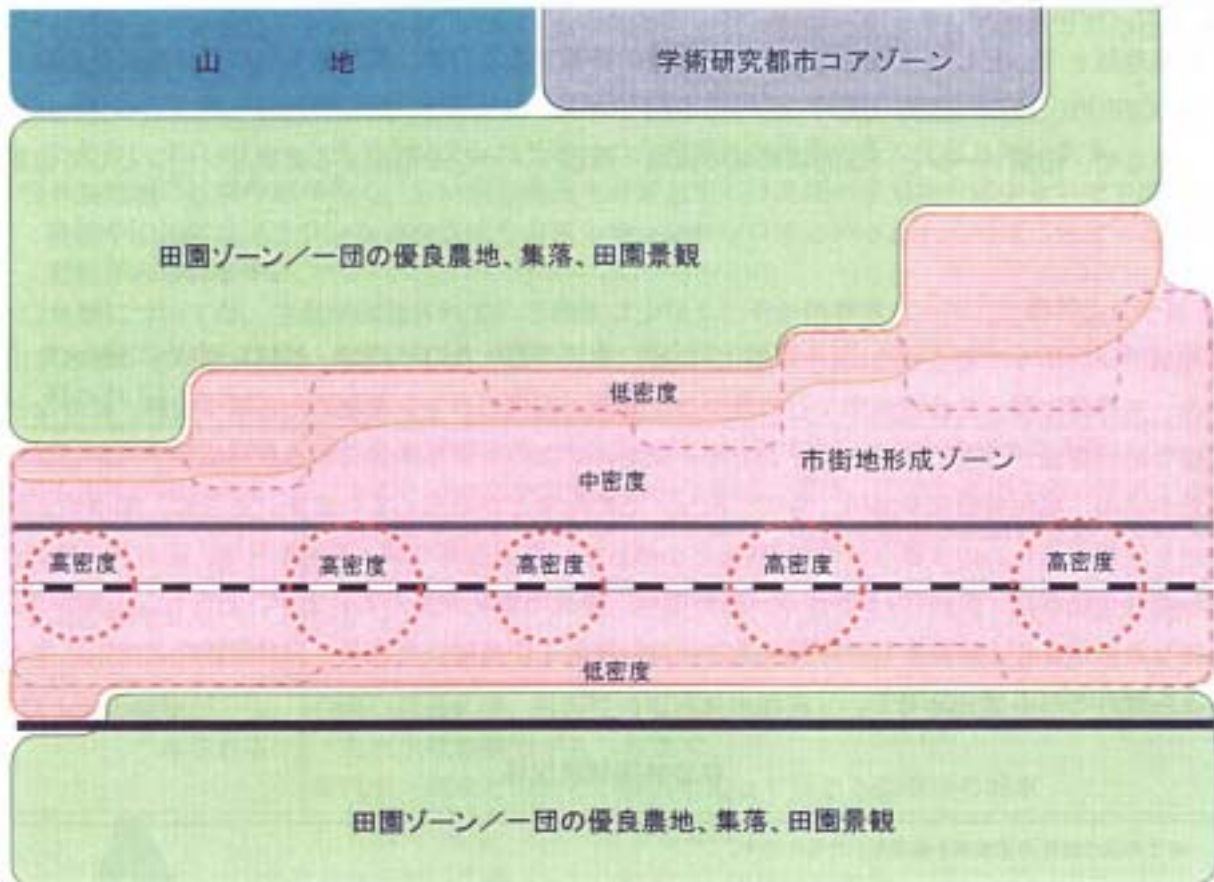
〈環境と調和した住宅地の整備〉

干満差の大きい今津湾に面する低湿地というゾーンの特性を踏まえ、遊水機能の保全などに配慮しつつ都市的土地利用を図ります。

〈海岸域での環境整備と活用〉

多様な施設が立地している田尻地先の今津湾に面した地区で、田園及び干潟と調和した環境整備を図るとともに、市民に開放された海岸線として活用します。

■田園ゾーンの位置づけ



田園ゾーンの保全方策

市街化調整区域及び農業振興地域である田園ゾーンにおいて、地区の特性に応じ、優良農地等の保全と農業の振興及び良好な市街地の形成、集落の振興などを図っていくための計画的な土地利用の実現を図ります。そのため、次のような現行法体系で対応可能な規制誘導方策(農業振興計画、都市計画)や補助・税制、融資などの方策により保全します。

さらに、農業・農村政策の中で一層の制度的充実を検討します。

農業経営効率化・農地流動化のための土地改良事業

農地保全のための補助・税制、組織化などの支援

農村活性化住環境整備事業等による宅地及び農地の整備

既存集落等での低密度な土地利用を保全するための地区計画

遊水機能としての農地保全のための補助・税制、あるいは緑化・公園化

農地保全に配慮した幹線道路の整備

幹線道路沿道での良好な街並み景観の形成を図るための地区計画

海岸域での緑化、遊歩道などの整備

九州大学の研究機能と連携した農業近代化支援事業や実験農業、環境共生型居住支援

(5) 自然農業保全・共生ゾーン

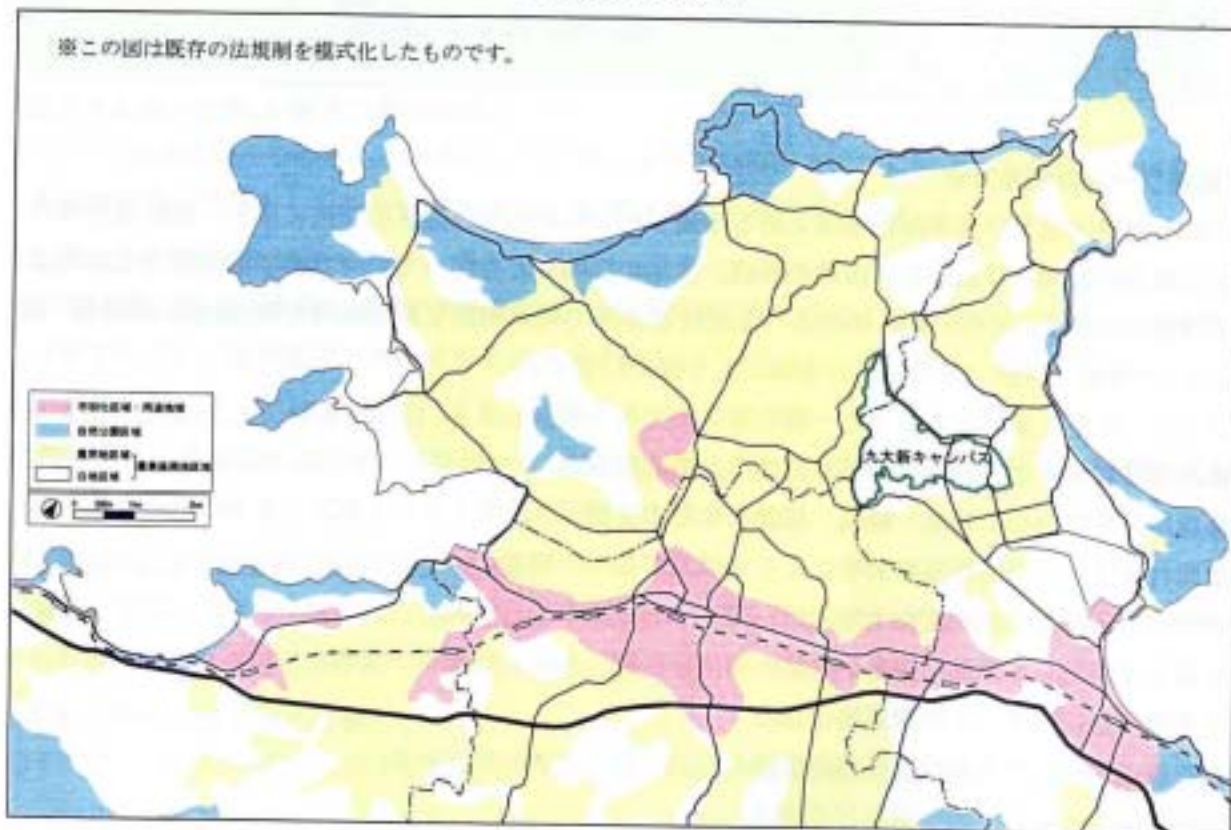
ゾーンの位置づけ

糸島地域を中心とした学術研究都市の1次圏の特徴である自然、農地あるいは既存集落からなるゾーンであり、農業の振興や農村の活性化を図りつつ、自然環境・集落景観等を保全するゾーンです。そこで、田園ゾーンと一体的に地域の環境・景観イメージを形成する貴重なゾーンとして位置づけます。

ゾーンの特徴

地域のシンボルである可也山(糸島富士)など、地域の雄大な自然環境・景観を構成する雄大な山並み、玄界灘に面した自然海岸などの豊かな生態系、古代のロマンを秘めた古墳や史跡、社寺など多様な地域資源が分布しているゾーンです。また、地域の主要な産業である農林漁業の対象となる農地や漁港、農山村集落や漁村、里山、河川・ため池などが分布しています。さらに、都市的土地利用を規制するための多様な法的規制(自然公園区域、農業振興地域・農用地区域、国有林、地域森林計画対象民有林、保安林)がかかり、自然環境、農業環境を保全しています。ただし、山地等では急峻な地形が多く、無秩序な都市的土地利用は災害発生の危険性を高め、自然景観などを阻害することも懸念されるゾーンです。

法的規制状況等



生態系の特性

<p>糸島地域の植物は、クロマツ林、シイ・カシ林やハマボウ群落に代表される温暖な海岸性の植物相を呈しています。</p> <p>また、今津湾は、近隣の博多湾や和白干潟とともに、渡り鳥や冬鳥の飛来地として有名な地域であり、クロツラヘラサギやツクシガモといった貴重な水鳥類が多く生息しています。</p> <p>糸島地域には耕作地が多く、広い生息範囲を必要とするほ乳類の生息種数は少ないですが、丘陵地や山地にはブチサンショウウオやカスミサンショウウオといった水辺環境に生息する水棲動物がみられます。</p> <p>魚類については、生息が確認されている種数は少なく、その種構成も九州北部で一般的にみられる種で占められています。なお、瑞梅寺川・雷山川の河口には、カブトガニの産卵場所が確認されています。</p>	
多様な水環境に依存する生物がみられる	糸島地域の山地・丘陵地には、ブチサンショウウオやカスミサンショウウオといった小面積の池沼や水田、溪流に産卵する両生類の生息がみられます。また、ゲンジボタルなどの昆虫類も小水路に生息しています。
干潟に依存した生物がみられる	クロツラヘラサギやホウロクシギ・アカアシシギといった干潟で採餌する鳥類や、カブトガニのように干潟で産卵する生物がみられます。
汽水性の植物がみられる	河口付近には、海浜性の塩沼植物群落・ハマボウ群落・ハマサジといった汽水性の植物がみられます。 汽水 = 海水と淡水との混合によって生じた低塩分の海水



保全と共生の基本的考え方

自然農業保全・共生ゾーンでは、無秩序な開発を規制するとともに、地域の環境・景観になじむ計画的な開発の誘導により地域の活性化、自然空間としての質の向上・改善、生態系の保全を図ります。

また、地域の自然や農業に配慮した分散型地域核“ほたる”を誘導し、自然や農業景観の保全を図ります。さらに、地域の多様な自然、歴史的資源を保全し、かつ有効活用を図り、地域のアイデンティティを確立し、多様な交流を促進します。

さらに、自然農業保全・共生ゾーンの中でも、糸島地域の特色を示す山並みや海岸線などからなる丘陵地・樹林等保全ゾーンは、学術研究都市においても貴重な環境資産及び景観資源として保全し維持していきます。とくに、当該ゾーンにおける“ほたる”の開発・整備に当たっては、丘陵地の自然地形や樹林を生かした土地利用や緑地の確保、あるいは開発・整備と合わせた樹林の再生、法面の緑化などにより、自然環境と共生した“ほたる”の実現を目指します。

また、市街地や山地周辺に広く分布する農地、あるいは集落や市街地からなる地域である保全・整備ゾーンは、農業の振興、集落や市街地環境の保全・改善を図るとともに、ゾーンの特色を踏まえた必要な基盤整備と合わせた適切な都市的土地利用を誘導し、ゾーンの活性化を図ります。とくに、当該ゾーンにおける“ほたる”の開発・整備に当たっては、周辺の既存集落や市街地の特性を十分に踏まえ、“ほたる”と既存集落や市街地が相互に連携し、既存の環境の維持・改善、あるいは活性化にも貢献できる“ほたる”の実現を目指します。

(6) 交通システムの形成

① 交通システム形成の基本原則

交通システムを考える場合、バスや軌道系などの公共交通を充実させるか、自転車・バイク・車などのパーソナル交通への対応を重視するかが問題となります。

交通弱者への対応、地球環境への配慮、学術研究都市のイメージづくりなど、社会的な条件から見ると、公共交通の充実が望まれますが、“ほたる”など居住・従業人口の少ないエリアでの公共交通の充実には限界があると考えられます。

一方、クラスター型の都市構造やキャンパスの広さを勘案すると、学生・教職員及び“ほたる”の居住者・従業者、地域の人々の自由で高い利便性を確保するためには、パーソナル交通を重視する必要があると考えられます。特に学生にとっては自動車やバイクの自由な利用を担保することが必要と考えられます。しかし、全ての学生・教職員がパーソナルな交通手段（自動車・バイク等）を持てるとは限りません。

このような条件を踏まえ、環境への対応と福祉への対応（交通弱者への対応）の両面を勘案し、公共交通とパーソナル交通のバランスを図りながら、次のような基本原則の基に学術研究都市にふさわしいゆとりを持ったU悠トランジット（University悠トランジット）を形成します。

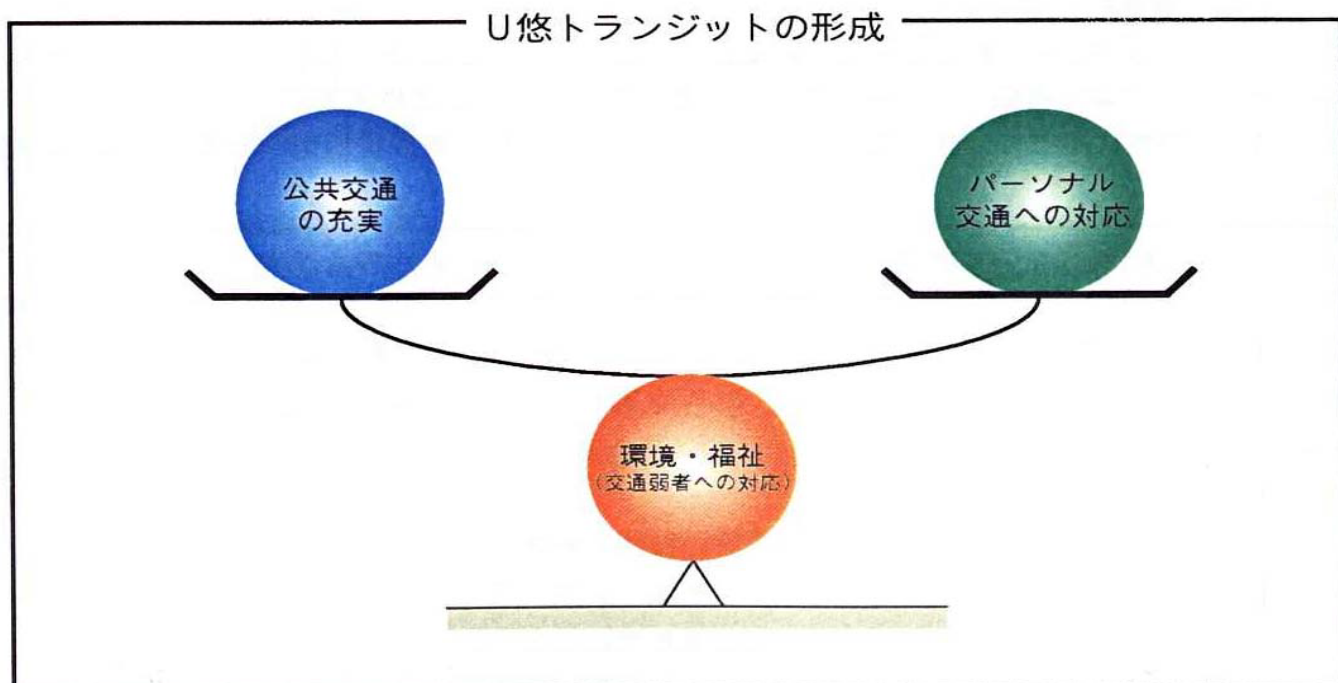
《基本原則1》

短期的にはバス運行を重視し、将来的には未来型公共交通も視野に入れた公共交通の充実を目標に、公共交通の運営に支障を与えない範囲で自動車、バイク、アシスト付き自転車、自転車等を重視したパーソナルな交通への対応を図ります。

地域骨格軸では『公共交通充実型』をより重視し、地域ネットワーク道路では『パーソナル交通充実型』をより重視します。

《基本原則2》

九州大学の研究シーズを生かして、環境への負荷がより少ない公共交通・パーソナル交通機関や、維持・運営システムの研究・開発を進め、これを学術研究都市に導入することにより、21世紀にふさわしい交通システムを構築し、その成果を全世界に還元することで新社会の創出に貢献します。



学術研究都市の交通システム形成の視点

基本原則を踏まえながら、次のような視点を念頭において学術研究都市の交通システム形成を進めます。

《基礎的な視点》

九州大学学術研究都市の形成を促す糸島半島全体の交通ネットワークの形成
ルートごとの役割に対応した交通システムの整備
地域の交通網の改善と強化に寄与する交通システムの整備
九州大学の学生、教職員のキャンパスライフを支える交通システムの整備

+

《新たな実験のフィールドとしての視点》

環境にやさしい交通システムの確立
交通に関する新たなソフトの提案とモラルの確立

《基礎的な視点》

九州大学学術研究都市の形成を促す糸島地域の交通ネットワークの形成

九州大学学術研究都市の形成を促すためには、駅や地域拠点ゾーンと九州大学新キャンパスを結びつける交通システム整備はもちろんのこと、糸島地域の交通基盤を充実させ、“ほたる”の立地を誘導する必要があります。

また、学生・教職員や糸島地域の居住者、及び来訪者が糸島地域の自然を楽しむためにも、地域全体の交通システムネットワークの形成が重要です。

- ・ 地域骨格軸の整備を進め、九州大学新キャンパスと地域拠点ゾーンや駅を利便性高く結びつける交通システム整備を進めます。地域骨格軸で公共交通の充実を目指すことはもちろんのこと、地域拠点ゾーンや駅を起終点としたバス運行を一定量確保することを目指します。
- ・ 地域ネットワーク道路は地域骨格軸と連携させながら整備し、学術研究都市全体の交通ネットワークを形成します。

ルートごとの役割に対応した交通システムの整備

学術研究都市全体の交通ネットワークを検討する際、利用者の立場に立って各ルートの性格や役割を明確にし、これに対応した整備を行うことが重要です。

- ・ 公共交通充実型のルートと、パーソナル交通重視型のルートを設定し、これに対応して道路や駅前広場などの基盤整備を進めます。また、アシスト付き自転車、自転車などを快適に利用できる自転車ネットワークの整備を積極的に進めます。
- ・ サイクリング、ジョギング、散歩などの余暇活動や、豊かな自然の享受による『いやし』効果が期待できるルートについては、道路の断面構成などに配慮しながら整備を進めます。
- ・ 各ルートの沿道特性に応じて、自然環境重視型、にぎわい創出型、景観重視型など個性的な道路整備を進めます。

地域の交通網の改善と強化に寄与する交通システムの整備

地域の交通網の強化に寄与するには、現況交通の問題点を十分把握した上で、改善方策を検討するとともに、将来の交通量の増加等に対応できる交通システムを構築することが必要です。

- ・ 夏期の渋滞、容量やネットワーク不足、沿道市街地への影響など、地域の現況交通問題を把握し、これを改善できる基盤整備を進めます。
- ・ 既成市街地や集落などの環境、優良な田園地帯等の特性に配慮しながら基盤整備を進めます。
- ・ 学術研究都市の機能配置等の検討にあたっては、地域の公共交通（バス運行）の維持を考慮します。
- ・ 将来の人口増加、産業の集積に対応できる基盤整備を検討します。
- ・ 超長期に関して、軌道系交通の導入にも対応できる基盤整備を念頭に置きます。

九州大学の学生、教職員のキャンパスライフを支える交通システムの整備

九州大学の学生及び教職員のキャンパスライフを支えるためには、フレキシブルな公共交通(バス運行)の充実を目指すとともに、パーソナルな交通手段に対しても一定レベルの対応をする必要があります。

- ・バス運行に対応した道路や駅・キャンパスでの交通結節機能の整備を進めるとともに、バスのピーク時輸送能力及び長い運行時間帯(始発、終発)の確保など運行水準の向上を目指します。
また、朝夕のピーク時と昼間、学期内と夏休みなど乗降客の増減等に対応できるフレキシブルなバス運行の確立を目指します。都心から九州大学新キャンパスへの直通バスの運行も検討します。
- ・駅や学内で、駐車場、バイク置き場、アシスト付き自転車充電施設、駐輪場などの整備を進めます。

《新たな実験のフィールドとしての視点》

環境にやさしい交通システムの確立

九州大学の研究シーズを生かして交通機関の改善や新たな交通システムの研究開発を行い、学術研究都市全体に導入していくとともに、これを世界に向けて発信し、人類への貢献を進めます。

また、新社会創出に向けた交通システム整備を、学術研究都市全体の研究テーマとしてとらえ、学術研究都市全体を実験のフィールドとして活用することを検討します。

糸島地域の海・山・田園風景などの豊かな地域資源と調和したライフスタイルの実現を目指し、安全で快適な交通システムとして自転車ネットワークを構築します。

- ・交通機関や交通基盤の低公害化、ローコスト化、省エネルギー化、新エネルギー対応、リサイクル対応、ユニバーサルデザイン対応などの研究開発を進め、学術研究都市への実験的な導入を検討します。
- ・短期的には、低公害型バスの導入を図るとともに、中・長期的にはローコスト・低公害の未来型公共交通の研究開発を行い普及を目指します。
- ・地域の豊かな自然環境を生かすとともに、九州大学の医療・健康センター機能などと連携し、サイクリングロードやジョギングロード、散歩道などを活用した健康維持・増進、いやしなどの効果を研究することも検討します。

交通に関する新たなソフトの提案とモラルの確立

交通のハード面の整備に加えて、情報システムの活用を図り、九州大学、自治体、交通事業者等でこれを生かすソフトを検討するとともに、交通システムを適切に維持・運営していくためのモラルの確立についても検討します。

- ・バス運行や、駐車場・駐輪場の管理・運営などに必要となる情報面・財政面・人材面の支援システムを検討します。
- ・自動車交通の軽減を目指して、カープールシステム、カーシェアリングシステム、アシスト付きを含む自転車レンタルシステム等の導入を検討するとともに、多様な交通のパーク(バイク、アシスト付き自転車、自転車等)・アンド・ライド(鉄道)の可能性を検討します。
- ・学術研究都市の理念を実現するため、公共交通やパーソナル交通の利用に関するモラルを高める方策を検討します。

交通システム整備の基本的考え方

学術研究都市に必要な交通システムは、学術研究都市の成長に合わせて整備していく必要があり、しかもその整備には長期間を要するため、段階的な整備目標を掲げて整備を進めます。

《成熟期の整備目標》

概ね学術研究都市が成熟する時点成熟期とし、次のような交通システムの整備を目指します。

- ・福岡市新駅の開業
- ・福岡都市高速道路5号線（月隈～福重）の完成
- ・西九州自動車道（福岡前原道路）前原ICまでの4車線拡幅 完成（平成14年度）
- ・学園通線（周船寺川～大学）の整備完成
- ・千里太郎丸線の整備完成
- ・福岡都市高速道路1号線（百道～福重）の完成（平成13年度）
- ・波多江駅から九州大学までの中央ルートの整備促進

《中期の整備目標》

九州大学全学移転完了前後を中期とし、次のような交通システムの整備を目指します。

- ・学園通線（伊都～周船寺川）の整備完成
- ・主要な地域ネットワーク道路（糸島半島の外周）の整備促進
- ・西側ルート（大学～志摩～前原）の整備促進
- ・波多江駅から202号バイパスまでの中央ルートの整備促進

《初期の整備目標》

九州大学移転計画の第1期開校前後を初期とし、次のような交通システムの整備を目指します。

- ・JR筑肥線唐津～筑前前原間の輸送力増強（複線化の検討など）
- ・国道202号福岡市内区間の拡幅整備促進
- ・佐賀方面とのネットワークを強化する道路等の整備促進
- ・福岡都市圏南部とのネットワークを強化する道路等の整備促進
- ・地域ネットワーク道路の整備促進
- ・海上交通の充実



■ 交通システム整備の基本方針図

(7)情報ネットワークの構築

21世紀が到来し、社会における情報化については、インターネットをはじめとした情報通信ネットワークの技術開発が急速に進展するとともに、情報通信インフラについてもデジタル化、超高速・大容量化がより一層求められており、ブロードバンド時代へと変貌しようとしています。今後もインターネット技術や高速通信インフラに関する研究開発が強力に推進されて行くものと考えられます。

また、これらを背景とした情報通信ネットワークの全国的な整備と、IT（情報技術）の活用・普及により、これまでの社会のあり方に大きな影響を及ぼす状況になっています。情報化の進展が情報通信事業分野のみならず、教育、福祉、医療等、生活のあらゆる分野のサービスに活用されるとともに、これらのサービスをいつでも、どこにいても受けられる「ユビキタスコンピューティング」の世界が期待できます。

九州大学学術研究都市における情報ネットワークの整備にあたっては、これらの情報通信環境の動向および社会情勢の変化に留意しつつ、九州大学新キャンパスにおいて構想されている情報ネットワークを核とした知の時代に相応しい新しい情報ネットワーク構築をめざします。

九州大学学術研究都市のネットワーク情報

九州大学ITキャンパスの構築を受けて、九州大学学術研究都市では学術文化・産業振興の展開を図ります。

<ネットワーク情報の活用例>

先端的学術分野の国際的な共同研究

- ・世界に向けた学術文化・科学技術の発信
- ・研究・教育活動、知的交流活動の展開

産業の振興に向けた産学官交流

- ・ベンチャー企業等への技術支援・移転、遠隔コンサルティング
- ・人材・研究環境などを提供できるレンタルラボ

高度で創造性豊かな人材の育成

- ・21世紀をリードするサイバー大学の推進
- ・世界との多言語同時翻訳を活用したサイバー教育
- ・ライブオンデマンドにより、いつでも受講できるオンライン大学
- ・研究成果を体験できるバーチャル実験室
- ・動画や3D等駆使した電子図書館・博物館

地域に密着した技術支援、相談

- ・実画像（動画・高精細画像等）を活用した遠隔農業診断
- ・技術指導・支援を行うバーチャル農業塾

九州大学学術研究都市ネットワークの基本的考え方

ブロードバンド時代における九州大学学術研究都市の情報通信基盤は、オリジナルな知的資産を世界のグローバル資産として形成・発信していく役割を担います。

先進的な学術情報発信と学術情報交流

学術研究都市のコアとなる九州大学と周辺地域、アジア、世界とが一体感を持ち、産学連携、国際連携、地域連携を促進できる広域的なネットワークの形成とデータベースの構築

IT技術等の積極的な活用

IT技術の開発、研究、試験的導入等を促進し、世界の先を行く魅力ある学術研究都市を形成

環境との共生

環境共生社会のモデルとして自然や環境・景観に配慮した統合的、計画的なインフラ整備の促進

ネットワークセキュリティの確保

安全で効率的な情報の提供を目的とした高度なネットワーク・セキュリティ技術の導入

効率的な運営管理

学術研究都市のネットワークサービスを効率的に運営するiDC (internet Data Center)の設置検討

九州大学学術研究都市情報ネットワークのイメージ図



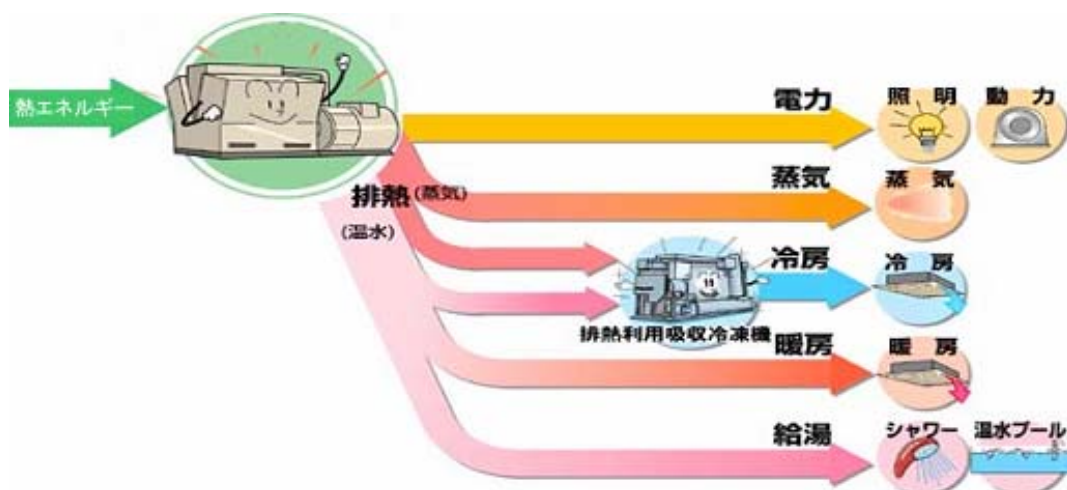
(8) エネルギー等循環型社会の構築

地球規模での資源・エネルギー・水不足が叫ばれる中で、その解決へ向けて供給能力の向上や国内外の英知を集結させることが求められています。また、石油危機等の化石燃料に対する不安から、自然エネルギー（太陽光、地熱、波力、風力、バイオマス等）をはじめとした新たなエネルギーに対する関心が高まっています。自然エネルギーは、永久的な利用が可能であり、クリーンであるため周辺環境に与える影響が少ないという長所がある反面、供給が不安定という短所が存在します。そこで九州大学学術研究都市では、九州大学の目指す未来型キャンパスから生まれる知的資源を活かし、共生社会の実現を目指します。

熱エネルギー供給システムの構築

九州大学学術研究都市では、知の創造と実践による共生社会の実現を目指しています。本構想に基づき開発を行うためには、地域の状況に応じ、都市ガス、プロパンガスに加え、環境面やエネルギー効率への配慮が必要であり、天然ガスを用いるなど適切な熱源を選択し、整備を行う必要があります。さらに九州大学の研究資源を活かし、都市内で生じる下排水からの廃熱利用システムの研究開発や、新たな熱供給システムの開発、他の熱源との併用システムの開発を検討していく必要があります。

熱技術エネルギーの展開例



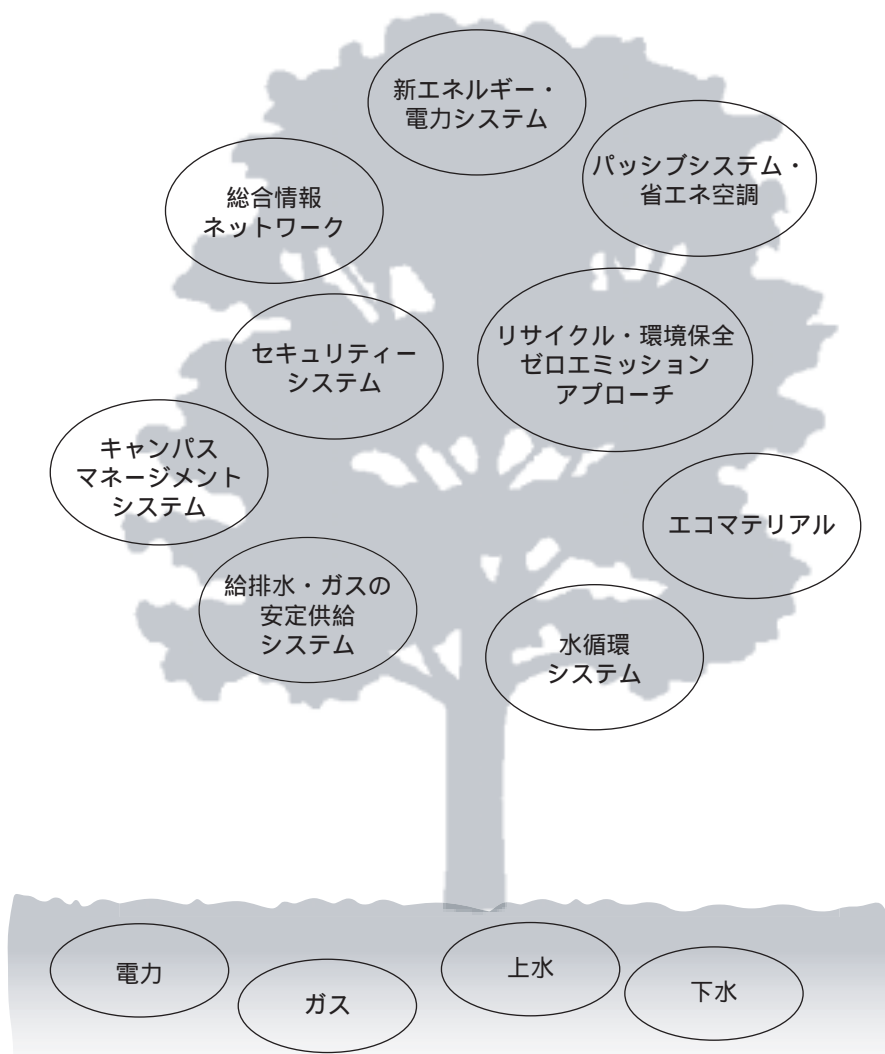
電力エネルギー供給システムについて

電力供給システムにおいても、九州大学学術研究都市は、周辺の環境と調和した新たなシステムの構築が必要です。将来のエネルギー需要に適切に対応していくために電力エネルギーの安定供給はもとより、送電施設等の適切、確実な整備を目指します。また、九州大学で現在行われている「風レンズプロジェクト」などの研究開発の推進と成果の積極的活用によって、環境にやさしいエネルギーシステムの開発・導入を進めるとともに、新たな交通システム等に対応した環境負荷の少ない電力供給システムの検討を行っていきます。

ゼロエミッションシステムの推進

九州大学で現在行われている「21世紀型有機性廃棄物の資源化」や「共生型発酵熱等回収システム」の研究開発・導入と地域への展開により、学術研究都市でのゼロエミッションシステムの構築を目指します。

九州大学の新キャンパスにおける総合的基盤整備の全体像



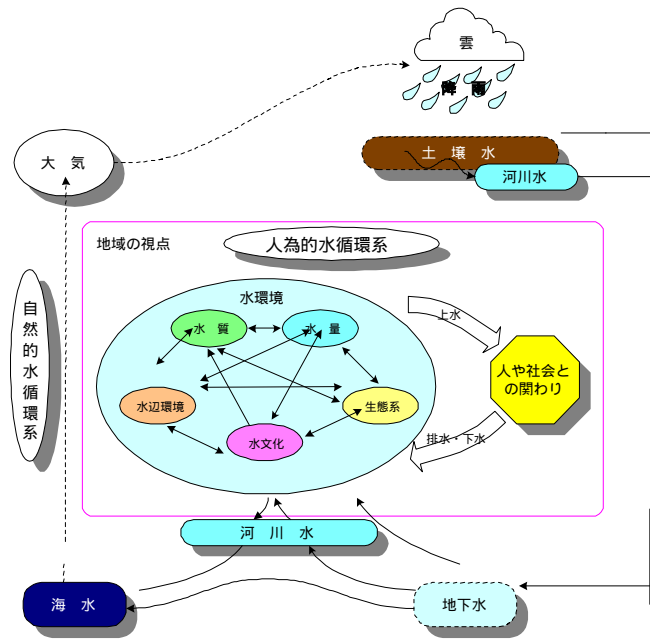
水循環型システムの構築

水は、自然環境の根幹の一つとして多様な生態系を支え、一定の場所に留まることなく形態を変えながら持続的に循環を繰り返しています。すなわち、水は地形や気象の影響を受け自然にひとつの循環系（システム）を形成しています。ここでは、前者を「自然的水循環系」とし、後者を「人為的水循環系」と呼びます。

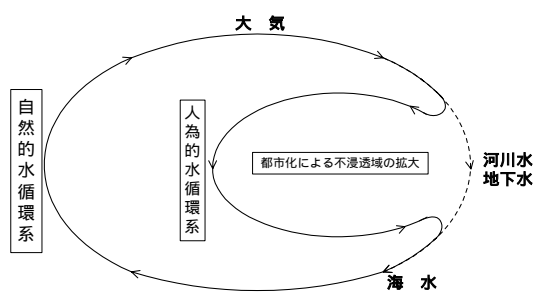
人間は、自然的水循環系の一部の水を人為的に循環利用することにより、生活の基盤を形成してきました（下図）。それに加え、都市域では都市化による不浸透域が拡大し、自然的水循環系の維持がさらに難しくなる傾向にあります。

九州大学学術研究都市では、循環型社会を構築していくため、現在の自然環境を保全・維持しながら、今ある環境を生かすまちづくりを行っていくことが重要であり、それに伴う自然的水循環系の変化をできる限り軽減していく必要があります。

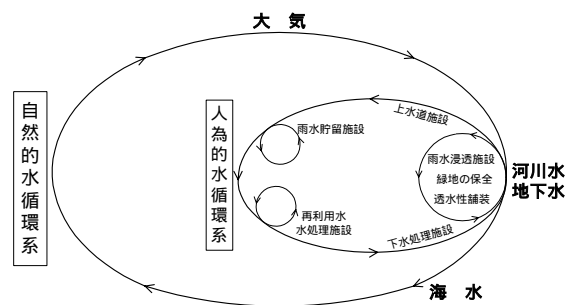
本地域においては、人口や水需要量は将来的に増加する傾向にあります。地区内の森林や農用地といった自然域が減少し、宅地などの市街地（不浸透域）が増加する傾向にあり、市街化が進展しています。したがって、九州大学学術研究都市における水循環型社会の構築のための具体的な検討と対策が急がれます。



水循環系の概念図



従来の都市域における水循環系の概念図



九州大学学術研究都市が目指す水循環系の概念図

特に、本地域においては、自然的水循環系と人為的水循環系のつながりや、人為的水循環系の多重構造を考慮しながら、水環境への影響をできる限り軽減できるよう配慮し、水資源の有効利用などエコロジカルな学術研究都市づくりを進めます。

九州大学新キャンパスにおいては、再利用水の処理プラントによる水資源の循環利用¹や地下浸透機能の導入²を進めます。またキャンパス内だけでなく、今後のまちづくりにおいても、緑地の保全、透水性舗装・雨水貯留施設などによる雨水の積極的な浸透や利用を考慮した施設整備を行っていくことが望まれます。

- 1 現在、箱崎キャンパスにおいてテストプラントを運用
- 2 新キャンパス マスタープラン（平成13年3月）より

九州大学学術研究都市における水循環型社会の構築に向けて

糸島地域の自然環境保全の視点

森林・水田・緑地の維持保全
自然的水循環系を維持するために、水資源への重要な涵養源である森林、水田および緑地を保全していく必要があります。

多様な水環境の維持保全
生物多様性を維持するために、生物の繁殖・産卵・生息場所である中州や寄州・水田・湖沼・湿地・溪流などの多様な水環境を保全する必要があります。

風や波などによって河口や海岸などに土砂が吹き寄せられて自然にできた州
干潟の維持保全
糸島地域で確認されている注目種の多くは、採餌・休息・繁殖を干潟に依存しています。そのため、河川の流量の変化や水質の悪化が少なくなるよう配慮し、干潟の維持保全を行う必要があります。

汽水環境の維持保全
糸島地域の汽水域の生態系を保全するためには、現在の汽水環境が変化しないよう十分配慮する必要があります。

健全な水循環の保全の視点

自然的水循環系への負荷の抑制
人間生活により発生する負荷が、自然的水循環系へおよびす影響をできる限り軽減することが重要です。

生態系の持つ浄化能力を考慮
生態系の浄化能力を確保するために、生物の多様性を保全・維持するよう配慮することが重要です。

まちづくりにおける水環境への配慮
まちづくりのエリアを検討する場合には、地域ごとの水環境の特性に配慮する必要があります。

自然との共生を考えたまちづくり

水資源の有効活用
今まで、海洋に流下させていた水資源を、人為的な水循環系にできるだけ取り入れ有効利用を行うことが必要です。（雨水貯留、河川洪水流量の利用、処理水の再利用など）

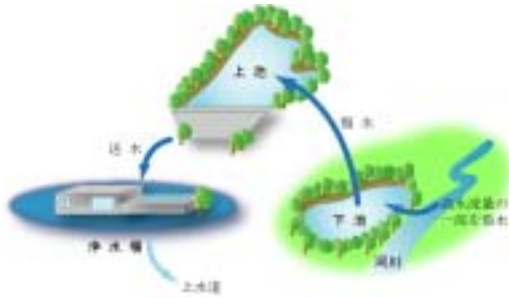
まちづくりにおける浸透域の確保
まちづくりに際し、域内の雨水をできる限り地下に浸透させるようにし、地下水への涵養を促進する必要があります。（雨水浸透ます、透水性舗装など）

地下水の適正利用
地下水障害（地下水位の低下など）が発生しないように配慮して、地下水の有効かつ適正に利用を行うことが必要です。

自覚を持たせるための啓蒙活動の推進
自然的水循環系の存在の重要性をより一層認識するため、その啓蒙活動を推進していく必要があります。

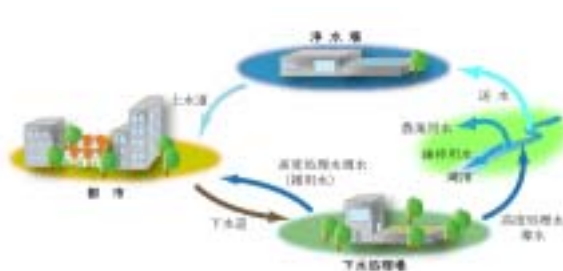
糸島地域における水資源開発手法についての例示

河川水の河道外貯留・揚水



河川近くに下池を造り、高水流量の一部を取水・貯留し、下池の貯留水を上池に揚水・貯留し、浄水場を経て水道用水として活用する方法です。

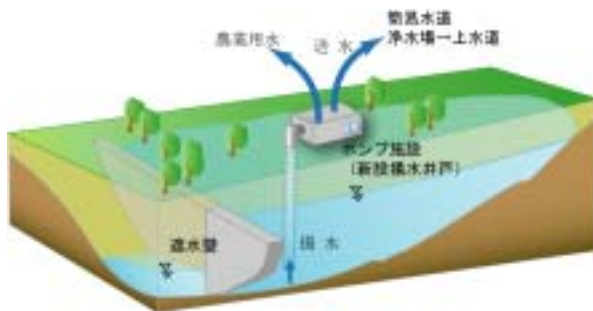
高度処理水の活用



都市生活により排出された処理水を、下水処理場で高度処理することにより循環利用する方法です。

高度処理水を河川に放流することにより、処理水を河川維持用水や農業用水として利用でき、その結果生じる余剰水を水道用水に活用します。

地下ダム



地下帯水層に遮水壁を設け、地下水流をせき止め貯留し、揚水して活用する方法です。

揚水された地下水は、そのまま農業用水に用いられたり、浄水場を経て水道用水として利用されます。

地下ダムによる開発水量は一般のダムに比べて小さいことが多いですが、その場合、小規模集落を対象とした簡易水道の原水などとして利用することなどが考えられます。

3 - 4 2次圏の空間構成と唐津・浜玉地域の整備の考え方

九州大学を核とした学術研究都市については、九州大学新キャンパスを中心に日常的な活動圏を形成すると想定される糸島地域を1次圏、さらに、1次圏の都市機能を補完し連携する半日活动圏(福岡市、前原市、志摩町、二丈町、浜玉町、唐津市)を2次圏として設定し、当該域内において種々の学術研究機能の整備、連携を図ります。

自然に恵まれ、アジアとの交流の歴史を深く刻んだ、学術研究都市の2次圏である福岡市から唐津市に至る地域において、九州大学新キャンパスと知の中央ステーション：HSTを核として、新しい理念にもとづくリサーチ・パークの展開や知的な生活環境を整備することは、九州北部のみならず西日本、ひいてはアジア全体の科学技術・学術文化の発展、産業経済の活性化、豊かな生活の実現に計り知れない貢献をするものといえます。

また、このような広域的に展開される多様な学術研究活動は、アジアス九州における他の拠点地域や九州全体、日本国内はもとより、アジア、世界とのネットワークへ発展していくことを目指すものです。

唐津・浜玉地域の役割、整備の方向

唐津・浜玉地域は、虹の松原や鏡山に代表される我が国でも一級の自然環境資源を有し、また人口、産業集積等においても、アジアス九州の新たな拠点形成に向けて重要な位置を占めています。こうした地域特性、ポテンシャルを活かし、九州大学学術研究都市の熟成に併せ、“知のステーション”を構築するとともに、域内への分散型地域核“ほたる”の立地、誘導を図っていくこととします。

佐賀大学海浜台地生物生産研究センター及び新たな学術研究機能等による“知のステーション”の構築

九州大学学術研究都市の各種機能連携等による分散型地域核“ほたる”の展開

西九州自動車道、JR筑肥線の複線化・高速化等の交通網整備による国際・地域交流拠点の形成

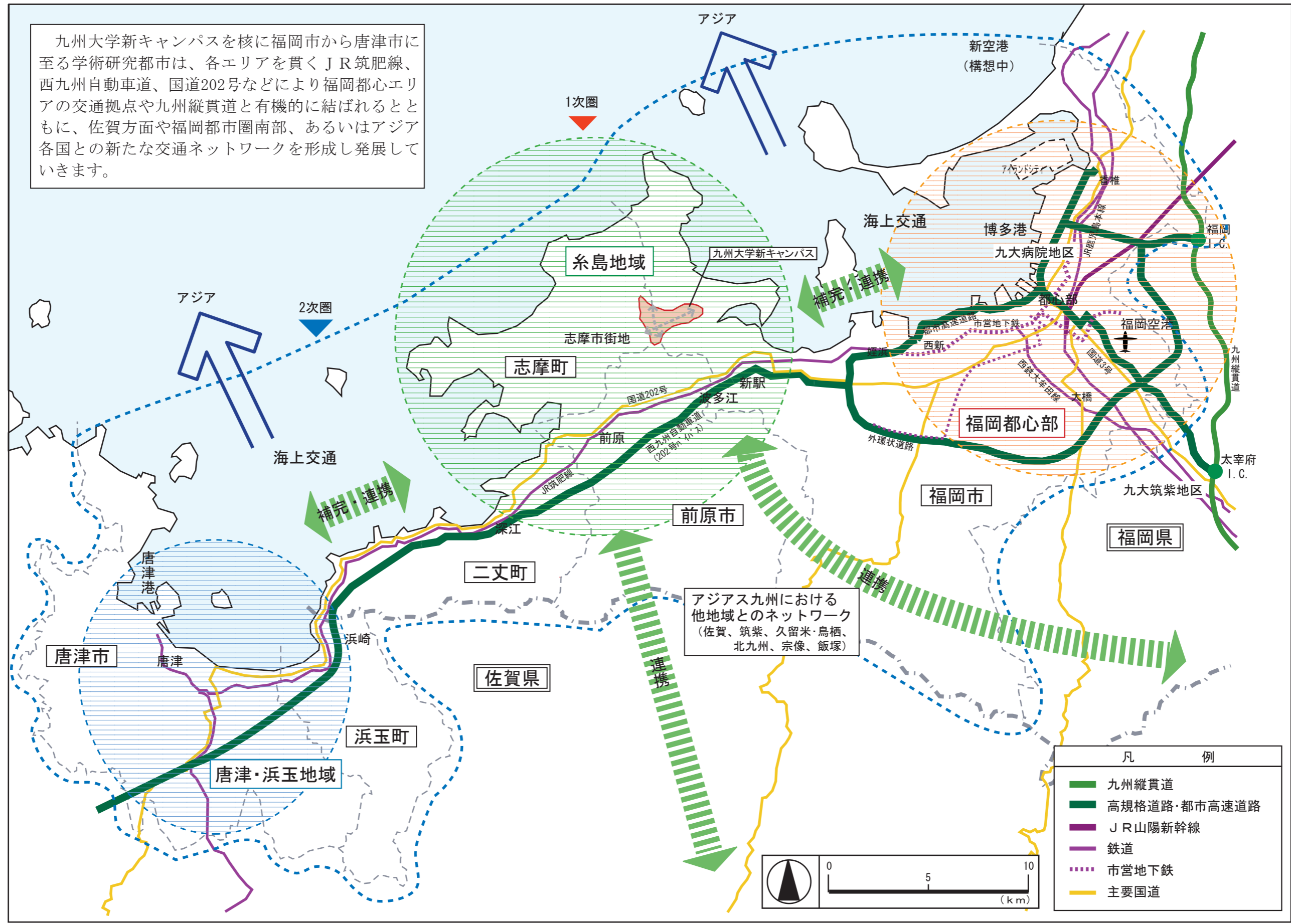
歴史、文化、自然を生かした「玄界灘マリライフ地区」等の観光リゾート拠点形成とコンベンション機能の充実による観光リゾートゾーンの整備

九州大学と連携した、活力ある地方拠点都市地域の形成(地域の特性を生かした産業・文化機能の導入、魅力ある都市機能の集積、ゆとりある住環境の整備 等)

福岡都市圏の奥座敷、癒し・セラピー的空間の提供

■ 2次圏の整備の考え方

九州大学新キャンパスを核に福岡市から唐津市に至る学術研究都市は、各エリアを貫くJR筑肥線、西九州自動車道、国道202号などにより福岡都心エリアの交通拠点や九州縦貫道と有機的に結ばれるとともに、佐賀方面や福岡都市圏南部、あるいはアジア各国との新たな交通ネットワークを形成し発展していきます。



アジアス九州における他地域とのネットワーク (佐賀、筑紫、久留米・鳥栖、北九州、宗像、飯塚)

参考一 学術研究都市の地域リソース

学術研究都市の2次圏には、高次の都市機能、多様な産業、優れた学術研究機能が集積するとともに、とくに、福岡市長垂山以西においては、次のような豊かな自然的資源や多様な文化財などの歴史的資源が残されています。

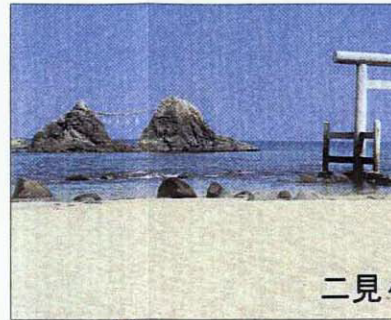
〈各都市の位置・沿革等〉

<p>福岡市 西 区</p>	<p>○福岡市西区は、玄海国定公園の景勝である生の松原から西浦に至る美しい海岸線と、能古島や玄海島、小呂島などの島、飯盛山などの背振山系から糸島半島に連なる緑の山並みを擁した豊かな自然環境に恵まれた地域です。</p> <p>○古代から大陸文化が伝来し、元寇防塁をはじめとする歴史的資産が多く点在する一方、市内でも有数の生鮮食料供給地として農林水産業が盛んです。</p>
<p>前原市</p>	<p>○前原市は、魏志倭人伝に記されているように、古代国家「伊都」が栄えた地であり、このことは日本最大の古代鏡“内行花文鏡”をはじめ古代のロマンを秘めた数々の遺跡、出土品からもうかがえます。</p> <p>○古くは、北部の志摩町との境に、加布里湾と今津湾を結ぶ糸島水道が通り船の往来があったと伝えられています。その後、自然の堆積と、江戸時代に入ってから干拓工事により水田がつくられ、現在の地形になっています。また、中心部の市街地は、江戸時代に宿場町として発展し、近年に至って糸島地域の中心となっています。</p>
<p>志摩町</p>	<p>○志摩町は、約7割が海、自然海岸に面し、西南部は引津湾、船越湾、加布里湾に臨む静穏で美しい海域、北西部は二見ヶ浦をはじめとする砂浜海岸が伸びており、とくに芥屋の大門を中心とする海岸及びその背後地は玄海国定公園に指定され、住民のみならず、福岡都市圏住民に憩いの場を提供しています。</p> <p>○一方、糸島富士と呼ばれる可也山や火山等の山地や丘陵地が町土に複雑に入り込み、その間に広がる農村・田園風景と調和した美しい自然的環境を維持しているとともに福岡都市圏の食料生産基地としての機能を果たしています。</p>
<p>二丈町</p>	<p>○玄界灘に面する二丈町は、古代から大陸との玄関口で、魏志倭人伝に記されている伊都国に属し、古くから農耕が営まれ、文明が栄えた地で、古代の生活形跡や様々な史跡・遺物などが今なお各所に残されています。</p>
<p>浜玉町</p>	<p>○浜玉町の北部は玄海国定公園の松浦潟に面し、北部より東部にかけて筑紫山脈の城山、十坊山、南東部は椿山、南西部は白山火山脈の鏡山などの山に囲まれ、美しい自然に恵まれています。さらに、玉島川をはじめとする中小河川が発達し、第4紀層の沖積土よりなる流域に位置し、肥沃で農耕に適し農業が町産業の基幹となっています。</p>
<p>唐津市</p>	<p>○唐津市は、表情豊かな海と島と松原、緑豊かな山や田園に恵まれた都市です。古来から大陸との交流が盛んに行われ、魏志倭人伝に唐津地方は「末廬国」として記述されるとともに、数多くの古墳群が分布しています。江戸時代には城下町として発展し、現在の唐津市の基礎が築かれました。さらに、近代に入っては、石炭産業の興隆によって栄え、また、港湾機能の発展に伴い工業や水産業などの産業が発展し、今日に至っています。</p>



芥屋の大門

志摩町			
	平成2年	平成7年	平成12年
人口	15,903	17,599	17,571
世帯	3,802	4,425	4,706
資料：国勢調査			
①	新町遺跡		
②	桜井神社		
③	六所神社の大楠		
④	芥屋の大門		
⑤	名勝二見ヶ浦		
⑥	幣(にぎ)の浜		
⑦	可也山		



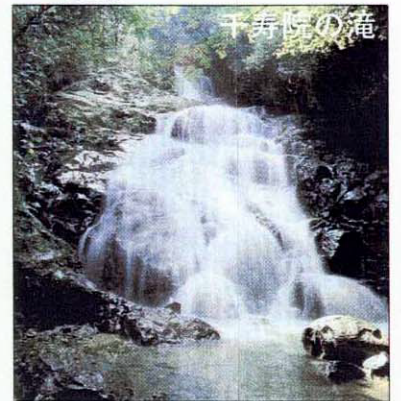
二見



虹の松原と鏡山



姉子の浜



千寿院の滝

浜玉町			
	平成2年	平成7年	平成12年
人口	10,224	10,296	10,414
世帯	2,502	2,684	2,824
資料：国勢調査			



観光ぶどう園

- ① 魚見台公園
- ② 万葉の里公園
- ③ 玉島神社
- ④ 諏訪神社
- ⑤ 三本松キャンプ場
- ⑥ 観光ぶどう園
- ⑦ 観光りんご園
- ⑧ マリンセンターおさかな村
- ⑨ 銘菓 けいらん

三本松キャンプ場



二丈町			
	平成2年	平成7年	平成12年
人口	11,457	13,148	13,587
世帯	2,989	3,623	3,945
資料：国勢調査			

- ① 曲り田遺跡
- ② 銚子塚古墳
- ③ 塚田南遺跡万葉公園
- ④ 深江神社
- ⑤ 浮嶽神社
- ⑥ 千寿院の滝
- ⑦ 姉子の浜(鳴き砂)
- ⑧ 真名子木の香ランド
- ⑨ 樋の口ハイランド
- ⑩ 福井神楽(福井白山神社)



内

3-5 知・住・悠の舞台となる快適空間の段階的整備の考え方

九州大学学術研究都市の形成は、長期にわたる事業であり、社会の変化にも対応できる柔軟な都市づくりを進める必要がありますが、現在、提案されている主なプロジェクトについて、初期（早急に着手し第1期開校前後には完成が望まれるもの）、中期（全学移転完了前後に完成が望まれるもの）、成熟期（学術研究都市の成熟段階で望まれるもの）の3つの段階で整理を行いました。

内 容		整備時期			考えられる主体等（参考）
		初 期 （早期に着手、第1期開校前後）	中 期 （全学移転完了前後）	成 熟 期 （学術研究都市としての成熟）	
学術研究都市コアゾーン	タウン・オン・キャンパス ：学内地区	本部事務、生活支援、展示情報発信、 国際交流、産学連携、地域連携、 コンベンション、居住・宿泊施設等の整備			大学主導、国、自治体・経済界などの協力
	タウン・オン・キャンパス ：周辺地区（北側・南側）	大学関連居住施設、生活サポート施設の整備 HSTの核となる施設の整備			大学、自治体、民間、推進機構など
	周辺地区（西側）	ほたるの立地（整備・開発）			大学、自治体、民間、推進機構など
ほたる		土地取引システムの構築、推進 ほたるの立地（整備・開発）			自治体、民間、推進機構など
市街地形成ゾーン		福岡市新駅、前原駅周辺の整備	その他の地区の整備 市街地形成ゾーン周辺部（田園ゾーンとの境界）の整備		自治体、民間など
田園ゾーン		保全方策の検討	田園ゾーンの保全		自治体、民間、推進機構など
自然農業保全・共生ゾーン		保全方策の検討	自然農業保全・共生ゾーンの保全、ほたるの立地（整備・開発）		自治体、民間、推進機構など
交通システム	アクセス道路	学園通線（周船寺川～大学）の整備	学園通線（伊都～周船寺川）、 西側ルート（大学～志摩～前原）の整備		自治体など
		中央ルート（波多江駅～大学）の整備	中央ルート（波多江駅～202 号線バイパス）の整備		
	地域ネットワーク道路		主要な地域ネットワーク道路 （糸島半島の外周）の整備	地域ネットワーク道路の整備	自治体など
	西九州自動車道	前原ICまでの4車線化の完成		唐津方面までの4車線化の整備	国、自治体
	鉄道（JR筑肥線）	JR筑肥線福岡市新駅の開業		JR筑肥線唐津～筑前前原間の 複線化の検討	JR
	未来型交通システム		大学内未来型交通システムの検討	学術研究都市未来型交通システムの検討	大学内：大学、大学外：大学、自治体、民間
広域交通ネットワーク				福岡都市圏南部、佐賀方面とのネットワークの強化 海上交通の検討	自治体など
情報ネットワーク		国際化に対応した多言語情報通信システムなど、アジア・世界との情報受信システムの検討、構築			大学、自治体、民間など
熱エネルギー、電力供給システム		地域の状況に応じ、開発を円滑に支援する熱エネルギー、電力システムの構築			自治体、民間など

初期は現在から概ね10年後、同じく中期は概ね20年後を目指すものです